

琉球大学学術リポジトリ

冠船芸能で上演された組踊の基礎的研究：
演劇故事と組踊台本との内容比較を中心に

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学 公開日: 2018-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 我部, 大和 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/40994

目次

序章 テーマ設定の理由と研究目的および研究方法

1. 先行研究の整理（冠船芸能・組踊・演戯故事とは）と問題提起
2. 演戯故事の史料紹介と研究史の整理
3. 研究方法
4. 本論の構成

第一部 漢文訳された「仇討物」

第1章 漢文訳された組踊「兄弟報仇忠孝並全（「二童敵討）」

第1節 「兄弟報仇忠孝並全（二童敵討）」について

第2節 演戯故事における「兄弟報仇忠孝並全（二童敵討）」の全文訳と組踊台本との内容比較

第3節 演戯故事・組踊台本の異同から見る「二童敵討」

第2章 漢文訳された組踊「婦人設計救君討敵（「大川敵討）」

第1節 「婦人設計救君討敵（大川敵討）」に関する先行研究

第2節 「婦人設計救君討敵（大川敵討）」の全訳注と組踊台本との内容比較・分析

第3節 演戯故事と周辺史料の異同から見る「婦人設計救君討敵（大川敵討）」

第3章 漢文訳された組踊「一人忠義再興基業（義臣物語）」

第1節 「義臣物語」の研究状況

第2節 「一人忠義再興基業（義臣物語）」の全訳注と組踊台本との内容比較・分析

第3節 演戯故事・組踊台本の異同と周辺史料から見える「義臣物語」

第4章 漢文訳された組踊「母子義情感動敵人（大城崩）」

第1節 「大城崩」の先行研究

第2節 「母子義情感動敵人（大城崩）」の全訳注と組踊台本との内容比較・分析

第3節 演戯故事と周辺史料などとの比較から見える「母子義情感動敵人（大城崩）」

第5章 漢文訳された組踊「伏山報讐忠孝両全（伏山敵討）」

第1節 「伏山報讐忠孝両全（伏山敵討）」に関する先行研究

第2節 「伏山報讐忠孝両全（伏山敵討）」の全訳注と組踊台本との内容比較・分析

第3節 演戯故事と周辺史料の異同から見る「伏山報讐忠孝両全（伏山敵討）」

第一部 小結 漢文訳された組踊の「仇討物」における主題

- 1 演戯故事に見る組踊の「仇討物」における作品の特徴
- 2 演戯故事における「仇討物」の人物表象

第二部 漢文訳された「世話物」

第6章 漢文訳された組踊「孝感除蛟姉弟興家（孝行の巻）」

第1節	「孝行の巻」における先行研究の整理
第2節	「孝感除蛟姉弟興家（孝行の巻）」の全訳注と組踊台本との内容比較・分析
第3節	演戯故事と周辺史料などとの比較から見える「孝感除蛟姉弟興家（孝行の巻）」
第7章	漢文訳された組踊「天縁奇遇児女承慶（銘苺子）」
第1節	「銘苺子」における先行研究の整理
第2節	「天縁奇遇児女承慶（銘苺子）」の全訳注と組踊台本との内容比較・分析
第3節	演戯故事と周辺史料の異同から見る「天縁奇遇児女承慶（銘苺子）」
第8章	漢文訳された組踊「児被賊劫狂婦苦尋（女物狂）」
第1節	「女物狂」に関する先行研究
第2節	「児被賊劫狂婦苦尋（女物狂）」の全訳注と組踊台本との内容比較・分析
第3節	演戯故事と周辺史料の異同から見る「児被賊劫狂婦苦尋（女物狂）」
第9章	漢文訳された組踊「夫婦約別得財再合（花売の縁）」
第1節	「夫婦約別得財再合（花売の縁）」に関する先行研究
第2節	「夫婦約別得財再合（花売の縁）」の全訳注と組踊台本との内容比較・分析
第3節	演戯故事・組踊台本の異同から見る組踊「花売の縁」
第10章	漢文訳された組踊「継母妬忌女兒拂雪（「雪払い）」
第1節	「雪払い」の先行研究
第2節	演戯故事における「継母妬忌女兒拂雪（「雪払い）」の全訳注と組踊台本との内容比較
第3節	演戯故事と周辺史料の異同から見る「継母妬忌女兒拂雪（雪払い）」
第二部	小結 漢文訳された組踊の「世話物」の主題
1	演戯故事に見る組踊の「世話物」における作品の特徴
第三部	漢文訳された「恋愛物」
第11章	漢文訳された組踊「手水佳偶契如日月（手水の縁）」
第1節	組踊「手水の縁」の研究状況
第2節	「手水佳偶契如日月（手水の縁）」の全訳注と組踊台本との内容比較・分析
第3節	組踊「手水の縁」における演戯故事と組踊台本との内容比較
第三部	小結 漢文訳された組踊の「恋愛物」
結語	演戯故事の史料的意義と今後の課題
一、	演戯故事の組踊の漢文訳と組踊台本の詞章
二、	演戯故事の組踊の漢文訳に見る首里王府の対清戦略
参考文献	
	【史料】
	【書籍】
	【論文】
	【資料】

【新聞資料】

【辞典】

・序論の概要

演戯故事とは首里王府が冊封使に組踊や琉球舞踊の内容を理解してもらうため漢文訳した解説書である。そのため、演戯故事は冠船芸能上演の際に、王府が冊封使に対してどのように演じ、解説したのかを知る上で重要な史料と位置づけられる。

・演戯故事の研究状況

i 戦前の演戯故事研究

演戯故事研究は、伊波普猷が嚆矢である。伊波は 1800（嘉慶 5）年尚温王冊封の際に、冊封副使として来琉した李鼎元が著した『使琉球記』に記した組踊の内容に関して、演戯故事を引用した可能性について言及したのが嚆矢である¹。真境名安興は組踊と能との比較に関する論考で、「執心鐘入」や「万歳敵討」、「花売の縁」の 3 番について演戯故事の記述を断片的であるが紹介している²。

戦前の演戯故事研究は伊波・真境名によって着目されている。しかしながら、これらの研究は、組踊の台本研究や能との比較研究であったため、演戯故事を中核とした論考ではない。

ii 尚家文書公開以前における演戯故事研究

演戯故事の存在は研究者の間でも取りざたされていたが、尚家文書が公開される以前、所蔵先が不明であった。そのため、演戯故事に関する研究の進展は望めなかった。池宮正治は尚家文書公開以前、徐葆光『中山伝信録』に記載された組踊の内容に着目し、随行した役人から組踊に関する説明があったか、戦前から話題に登っていたとおりの演戯故事という説明書の存在があった、と推測している³。

畠中敏郎もまた、尚家文書公開以前より演戯故事の存在に着目しているが、どのような史料か不明だったため、「幻の書」として指摘していた⁴。

iii 尚家文書公開以降の演戯故事研究

1995（平成 7）年に尚家当主であった尚裕は尚家で所蔵していた文書群を那覇市歴史博物館へ寄贈した。それにより、尚家文書の中から演戯故事が発見され演戯故事研究は大きく進展する。

池宮正治・大城學は演戯故事に記された琉球舞踊の漢訳を検討し、七言二句というスタイルで漢文訳されていたことなどを指摘している。また、演戯故事中の琉球舞踊の歌詞の漢文訳を琉球舞踊 5 題（「若衆こてい節」「鞆鼓踊り」「若衆磨」「天川」「諸屯」）の琉歌と比較・検討している⁵。池宮・大城の研究により、演戯故事は組踊のみならず琉

¹ 伊波普猷「琉球劇」『日本文学大辞典』（1934 初出）（『伊波普猷全集第十巻』平凡社、1976、199 頁所収。）

² 真境名安興「組踊と能楽との考察」伊波普猷『校註琉球戯曲集』榕樹社、1992、696・718 頁。

³ 池宮正治『琉球文学論』沖縄タイムス社、1976、253 頁。

⁴ 畠中敏郎「組踊と冊封使録」沖縄タイムス、1976 年 10 月 12 日。

⁵ 池宮正治「冠船芸能の準備一踊奉行の任命と故事集一」『沖縄開発振興推進調査報告書』文化庁文化財保

球舞踊の歌詞の内容も漢文訳された解説書として紹介されることになる。

演戯故事に記された組踊研究について、當間一郎は徐葆光『中山伝信録』中の「鐘魔事」項目と演戯故事に記されている「□女為魔義士全身（執心鐘入）」の漢文訳との内容比較を行い、「〈女羞且怒、持獵具欲殺松寿、松寿走、女逐之〉（女は恥じて、その上怒り、獵具を持って、松寿を殺そうとした。松寿は走り出ると、女はこれを追う）とあって、[中略]〈獵具を持って松寿を殺そうとした〉とあるが、台本上には全く見当たらない。中国の使者へのサービスとして、オーバーな表現になったのであろうか。あるいは中国的表現であらうか⁶」と推論している。

矢野輝雄は組踊の漢訳により儒教倫理観が琉球に及んでいることを来琉している冊封使へ指し示すにあたり、演戯故事が重要な役割を担っていることを指摘している⁷。一方、矢野は、當間と同様に徐葆光『中山伝信録』と演戯故事に記されている「□女為魔義士全身（執心鐘入）」とを比較検討し、演戯故事の内容が写実的で組踊の世界を無視したものであると當間と同様に批判している⁸。

高津孝は、演戯故事に関して演戯故事の文体について、「古典漢文で4字句を中心に構成しているが、口語的表現も混じり白話に近い」としている。また演戯故事で記された「二童敵討」の漢文訳と組踊台本を掲載し紹介している⁹。

板谷徹は台本と演戯故事との比較を通して、演戯故事の特徴を三つピックアップしている。まず①台本には記載されていない登場人物の名称や年齢が演戯故事からうかがい知れる、または登場人物の名称の差異が確認される、そして②作品の時代設定が演戯故事に明記されている、最後に③台本に見られぬ演出が演戯故事に見られるとしている。他にも、板谷は演戯故事と朝薫以外の組踊台本との比較・考察をした上で、朝薫が創作した組踊との相違を挙げている。また、冊封使録の記載の変化について、徐葆光以降、時代を経る毎に組踊内容の記述から組踊の登場人物を取り上げる方式へと変化している点に着目し、冊封使が冊封使録で組踊の人物をより具体的に表象していることから、演戯故事が台本より詳細であったであろうことを指摘している¹⁰。

このような写実的な記述については、一部の記述のみならず、組踊の内容全体を演戯故事・組踊台本・冊封使録との比較によって考察すべきであろう。そうした比較検討を通して王府がどのように組踊を冊封使たちに伝えたのかを垣間見ることができよう。

拙稿では演戯故事と組踊台本との比較をもとにその異同の背景に関して、周辺史料などから「雪払い」「孝行之巻」「大城崩」の作品を検討し、冊封使に儒教的要素を強調し

護部伝統文化課、1993、12頁。大城學『沖繩芸能史概論』砂子屋書房、2000、27—29頁。

⁶ 當間一郎『組踊写本の研究』第一書房、1999、132—133頁。

⁷ 矢野輝雄『組踊への招待』琉球新報社、2001、40—41頁

⁸ 矢野輝雄『組踊を聴く』瑞木書房、2003、298頁。

⁹ 高津 孝「組踊と演戯故事」『第2回琉球漢詩文研究会』2015.3.14 報告資料（平成26—28年度科学研究費補助金基盤研究（B）高津 孝編『新出資料による琉球処分期琉球知識人の総合的研究—そのアイデンティティに着目して—報告書』、鹿児島大学、2017.7.）

¹⁰ 板谷 徹『近世琉球の王府芸能と唐・大和』岩田書院、2015、212頁。

ていることなどを指摘した¹¹。

他にも拙稿では、演戯故事の史料の作成および冊封使への呈上過程について、評定所と久米村方ならびに冠船躍方が連携した上で作成した。さらに、冊封七宴で芸能が催される仲秋宴の前日に冊封正副使および参将・副将・弾圧官と阿口通事に呈上していたことを指摘した。したがって、演戯故事が単なる解説書ではなく、王府側の政策的な意図も含み作成された文書であることがわかる¹²。

以上のことから、演戯故事研究は尚家文書公開後の研究が大きく進展している。しかし、現行の研究では、公開された尚家文書の全ての演戯故事を俯瞰した研究はなされていない。また、すべての組踊に儒教倫理観を見出せるかどうかは、演戯故事の内容を具体的に詳細に分析する必要がある。そのため、演戯故事における組踊にかかる内容全てと組踊の作品にかかる「故事」や周縁の社会状況を知ることが必要であろう。

他にも組踊台本と比較することで、本来あった組踊が上演される意図や演出の原点を加味し、さらに重要な史料として新たな史料的价值を見出すことができる。

・研究方法

i 演戯故事・組踊台本との異同

本論では、まず演戯故事 5 点のうち史料の修復が終了し、一般公開されている 4 点①「戊戌冊封諸宴演戯故事卷之六」1838（那覇市歴史博物館蔵、尚家文書第 126 号）、②「演戯故事」1808（那覇市歴史博物館蔵、尚家文書第 127 号）、③「丙寅冊封諸宴演戯故事卷之九」1866（那覇市歴史博物館蔵、尚家文書第 248 号）、④「丙寅冊封那覇演戯故事卷之十一」1866（那覇市歴史博物館蔵、尚家文書第 250 号）を対象とする。

つぎに、上述した史料のうち、組踊は 21 番（重複を含む）所収されている。このうち重複および組踊台本のない組踊「瀬長按司」を除外した組踊 11 番を研究対象とする。その組踊 11 番は①「二童敵討」②「大川敵討」③「義臣物語」④「大城崩」⑤「伏山敵討」（以上、「仇討物」）⑥「孝行の巻」⑦「銘苅子」⑧「女物狂」⑨「花売の縁」⑩「雪払い」（以上、「世話物」）⑪「手水の縁」（以上、「恋愛物」）¹³。である。

組踊台本は、原則として現存している台本で近世琉球に書写された台本を底本とする。ただし、近世琉球期の台本が現存していない場合、最も古い台本を底本とする。これら

¹¹ 我部大和「冊封使に供された組踊〈雪払い〉の一考察—演戯故事・組踊台本の内容比較を中心に—」琉球大学国際沖縄研究所編『越境する東アジア世界 第 15 回琉中関係国際学術研究会論文集』琉球大学国際沖縄研究所、2016.2。・我部大和「冊封使に供された組踊〈孝行の巻〉に関する一考察」琉球大学国際沖縄研究所編『国際琉球沖縄論集』第 6 号、琉球大学国際沖縄研究所、2017.3。・我部大和「〈演戯故事〉に記された組踊〈大城崩〉に関する一考察—組踊台本・冊封使録との内容比較を中心に—」沖縄文化協会編『沖縄文化』第 121 号、沖縄文化協会、2017.8。

¹² 我部大和「演戯故事から見る近世琉球の組踊りの世界」琉球中国関係国際学術会議編『琉球大学法文学部・台湾大学文学院国際学術会議シンポジウム論文集 トランスナショナルな文化伝播—東アジア文化交流の学際的研究』琉球中国関係国際学術会議、2015.3。

¹³ 演目順は筆者により原則として①「仇討物」「世話物」「恋愛物」の 3 ジャンルに分類する。②3 ジャンルに分類の上、各ジャンルで演戯故事 4 点に所収されている演目が多い順に並べた。

の演戯故事の漢文訳および組踊台本の詞章から組踊台本の詞章の異同を抽出する。

演戯故事には内容の異同のみならず、登場人物の所作を知ることができる記述がある。それにより、現代に踏襲された組踊の演出に関する検証をすることも可能である。また、演戯故事・組踊台本の内容の異同からは、王府や組踊の作者が創作した際に、どういった点を重視していたのか、さらに歌や踊りはどのように漢文訳されたのかによって生じる冠船芸能における組踊の見所および聴きどころをより深く知ることが可能となる。

演戯故事・組踊台本の詞章および歌との比較は、現代上演されている組踊の演出などにおいても重要な情報をもたらすであろう。公開された演戯故事が、組踊の演出や作品を議論するにあたり、研究者や実演家にとって重要な史料であることはいままでもない。

ii 演戯故事・組踊台本の異同を周辺史資料から分析

まず、演戯故事の漢文訳および組踊台本の詞章の異同を抽出する。つぎに、演戯故事・組踊台本異同の背景を探るため、組踊の創作のモチーフとなった「故事」や組踊が創作された際の琉球王国時代の史資料などを駆使する。その上で、組踊が創作する際の「故事」や琉球王国時代の社会状況を把握する。

次に、冊封使が観劇するにあたり、組踊の創作にかかるモチーフを漢文訳する際、加筆された内容や中国の故事なども検討する。それにより、組踊が冠船芸能で上演される際に、組踊を創作するモチーフを冊封使に如何に伝え、冊封使がいた中国の故事や儒教的な要素がどのように加筆されたのかなどを検討し、冠船芸能で組踊が上演される意義を論証する。

・第一部 漢文訳された「仇討物」の概要

第一部では漢文訳された組踊の「仇討物」5番（第1章「二童敵討」、第2章「大川敵討」、第3章「義臣物語」、第4章「大城崩」、第5章「伏山敵討」）をまず演目毎に検討した。ここでは、漢文訳された「仇討物」5番において、作品の特徴を述べた上で通底する主題が何か分析した上で、冠船芸能における組踊の「仇討物」をどのように見せようとしたのかを各作品特徴についてどのようなものがあるのか検討する。

第1章 漢文訳された組踊「兄弟報仇忠孝並全（「二童敵討」）」の概要

「二童敵討」は護佐丸・阿麻和利の乱を基にした組踊である。演戯故事では冒頭で、護佐丸に関する内容が詳述されており、護佐丸の忠臣ぶりを紹介した内容となっている。一方、組踊台本の冒頭では敵方の阿麻和利が登場するため、組踊との展開に差異がみられる。その要因として、「二童敵討」の場合物語の前段である「毛国鼎」と「阿公」との中山王に対する「忠臣」と「逆臣」の対立構造を冊封使に理解させる必要があったのであろう。そのため、演戯故事では「毛国鼎」の紹介を追記したと考えられる。また、「毛国鼎」と「阿公」の紹介は、琉球王国の正史である「中山世譜」・「球陽」の記事を援用したものであり、演戯故事作成の際参考にしたと考える。

冊封使は「二童敵討」が国に対する「忠」をつくす臣下と逆臣との間の「故事」であることを容易にかつ深く理解することが可能となった。

また二童が父の敵であり国の逆臣であった阿麻和利を首尾良く討ち果たし、儒教倫理観としてある国への「忠」と親への「孝」が主題である。上述した場面以外に演戯故事では、二童へ守り刀を渡し、二童の仇討ちが失敗したら首をくくって死ぬ覚悟があると述べる内容が記されている。この内容は、二童の母も夫の死後に殉死しようとする「烈婦」として女性として持っている儒教倫理を表象していることがわかった。

したがって、母の存在は、婦女として貞操を保つ「節婦」と「烈女」を体現する人物であったことを演戯故事の漢訳で追記する。それにより、主人公のみならず脇役である母も儒教倫理観を体現する人物であったことを冊封使に示すものであったことがわかる。

他にも、演戯故事では査国吉が登場する。査国吉は組踊台本の鶴松の詞章に「国吉のひや」とあるのみで、舞台上には登場しない。しかし、演戯故事では二童の父である護佐丸が乱によって殺されたことの嘆きや二童が仇討ちへ向かおうとする際、仇討ちの内容を論議する内容が記されている。演戯故事の内容より査国吉は、二童の里方の祖父にあたる存在である。二童の父方は皆殺されている点から、二童にとって男性で唯一の尊属であったと思われる。しかし、査国吉は自らの齢を理由に仇討ちには加勢できない。

そのため、二童が仇討ちへ向かうにあたり、母や査国吉らは大きな後押しをしたこと演戯故事からは見られ、台本では推測で見ることしか出来ない部分を漢文訳で描出している。

以上のことから、演戯故事が果たした役割も含めて「二童敵討」の内容を検討すると、演戯故事で主人公のみならず他の登場人物にも儒教倫理としての要素を付加することにより、組踊が冊封使へ歓待をした上で、儒教を「恭順」に受け入れているということを表すための「国劇」としての存在が浮かび上がってきたことがわかる。

組踊は単なる冊封使への歓待芸能という枠組みを超えて「二童敵討」は、儒教思想を全面に加えていることから冊封使に向けて、華夷秩序の中でも儒教を受容しているということを大きくアピールすることが組踊に求められ、演戯故事でもその王府の意図を斟酌した上で書かれていたと考えられる。

第2章 漢文訳された組踊「婦人設計救君討敵（「大川敵討」）」の概要

「大川敵討」は、「二童敵討」と同様に「逆臣」谷茶按司と「忠臣」村原のひやという「逆臣」対「忠臣」の対立から「忠臣」が「逆臣」を打ち負かす内容となっており、演戯故事の漢文訳でもその内容は強調されていることがわかる。

次に、主人公の表象として主君に対する「忠」および親に対する「孝」が見られる。「大川敵討」では「孝」はあまり強調していないように見える。しかし、乙樽は村原の比屋が主君の大川按司と戦死したと思い、谷茶城から母と子を一緒に逃れてきた。そこで、年をとった母を介助するために子を犠牲にする行為が見られる。このような行いは、義理の親に対する「孝」として表象されることがわかる。そのため、仇討ちした人物は「忠」

「孝」を体現した人物として表象されており、王府はその儒教的徳目が「故事」として戯曲で演じられていることを冊封使に理解してもらうために用いているのであり、それが仇討物の「キマリ」となったのであろう。

一方で、「大川敵討」の独自の内容として、まず主人公が乙樽の活躍により夫である村原の比屋の本懐を遂げる内容となっている。その過程で乙樽は敵陣の谷茶城で生け捕りになっている若按司を奪還するため乳母として乗り込むと、谷茶按司の臣下である石川や満名が詰問してきた。しかしその時に、谷茶は乙樽の色香に惚れてしまい、尋問は中断する。さらに谷茶は乙樽に求婚するまで心を奪われる。その後、谷茶は臣下が諫言するも聞き入れず、「盲目」となってしまう。こうした場面では、乙樽の色香や人心掌握をする内容などは演戯故事の漢文訳により組踊台本の詞章に則して記されている。このため、「二童敵討」とは異なり夫の本懐を遂げるため、妻が危険を冒して行く姿は「忠孝婦人」と冊封使にイメージ付けをしたと思われる。

本論で取り扱う仇討物について、「二童敵討」や「伏山敵討」では、二童あるいは若按司と忠臣一人にたいして少人数で敵方と対峙する内容となっている。一方「大川敵討」は、村原が原國兄弟や喜瀬の大屋子、瀬底下ごおりなど多くの人物が関係して討伐の差配を行っており、大人数で敵方に向かう内容である。「大川敵討」以外に、「忠臣身替之巻」などが多くの加勢によって敵方を討つとなっている。このように、組踊の仇討物が様々な工夫を凝らし創作されている。そのため、物語の構成は多様に仇討ちの手法などを変えて冊封使に飽きさせずに観劇させる工夫が見られ、演戯故事でも舞台上の見せ所や聞き所などに配慮しながら漢文訳していたことも知れよう。

最後に、「大川敵討」を創作するに当たってどのような要素が盛り込まれたのか、それらは演戯故事にどのように反映されたのか検討した。間接的ではあるものの、組踊に見られる地名からは「大川グスク」という実在のグスクを用いている点や村原が扮した「若狭町村」の商人は若狭町村が商人の集う街ということ演戯故事で冊封使にイメージづけている。管見の限り、近世琉球以前において若狭町が商人の街という記述は管見の限り見られない。

そのため、按司が直接領域支配をしていた時代の要素と若狭が商人の街であるという近世的な要素が混在していることなどから、その当時の情報と「故事」としての情報を取り入れて、組踊を創作したと推測している。

第3章 漢文訳された組踊「一人忠義再興基業（義臣物語）」の概要

組踊「義臣物語」では、まず演戯故事の漢文訳で琉球王国時代の三山時代の故事であると記し、「兼城郡司」（高嶺按司）が「東平按司」（鮫川按司）により討たれることから始まっている。それは首里王府が「山南」同士の争いを「故事」としていることを冊封使にイメージさせようとしたのであろう。一方、「大城崩」において大城按司を滅ぼし、財を得て暴政を行った大里按司を滅ぼした按司の名も「鮫川按司」であり、同名で

ある。

「義臣物語」と「大城崩」の時代設定にも若干異なっている。義臣物語では「往昔本国勢分鼎足時」となっており、三山時代の故事としている。一方で、「大城崩」では「球国亂世之時」となっており、おそらく三山時代以前の按司が乱立した時代とある。そのため、冊封使には「義臣物語」と「大城崩」を別時代の「故事」伝えようとしたのではないか。

したがって、冊封使に対しては別の「故事」として認識してもらうため、王府が漢文訳を行うにあたり「義臣物語」では「大城崩」の組踊台本の登場人物の名称を変更及び時代設定の区別をしたのではないかと思われる。

次に、演戯故事と組踊台本の台詞や所作と比較した。たとえば、おめなりは生きていても無駄だとして死にたいと漏らす。すると兼城若按司（高嶺若按司）が東平按司は「不共戴天」の敵なので討伐すべきであると述べる内容が演戯故事にのみ漢文訳されている。また、演戯故事では曾長（崎本の子）が兼城若按司（高嶺若按司）のご飯を持ってくる所作があるなど多々見られる。このため、組踊台本で現代において脈々と継承されている演出との比較や再検討をすべき部分であろう。

最後に、「義臣物語」は仇討物である。演戯故事に記された仇討物の組踊では「大城崩」と同じ和睦へと向かう結末を迎える。結末が類似している背景にどちらも田里朝直の作品である。田里の作品には首尾良く仇を討つ「万歳敵討」もあるが、「義臣物語」や「大城崩」では敵・味方双方が和睦へ向かっている。おそらく冠船芸能という場を意識して、一方が減されるといよりも双方を活かすことにより、儒教的な要素を悪役の周辺あるいは仇討ちを討つ方に持たせることで作風に独自の路線を見いだしたのではないかと思われる。

このため、仇討物が全て首尾良く仇を討つ結末と敵方や味方ともに儒教的要素をもたせて和睦へ向かわせる結末があることがわかる。そうした心情を示すことで、王府は多様な「仇討物」を上演し、漢文訳を行い、冊封使へ芸能で上演していたのではないか。

第4章 漢文訳された組踊「母子義情感動敵人（大城崩）」の概要

「大城崩」における主人公はをなぢやらである。をなぢやらは、虎千代と金松という二人の子がいた。しかし、虎千代は継子で、金松は実子であった。をなぢやらは、子供達が馬天浜で処刑されそうなを見て、継子を守る代わりに、実子を犠牲にしようとした。この行為が敵である大城若按司と外間の子を感動させ、二人を処刑せずに赦す結末となっている。

冊封使録では、「大城崩」の内容に関しては、前述したようにをなぢやらが継子をかばうため、実子を犠牲にしようとしたことで「賢婦」として記された。このため冊封使たちは、「大城崩」の内容を演戯故事などで内容を理解し、鑑賞したと考えられる。

冊封使たちはなぜ、「大城崩」の中でもをなぢやらを冊封使録に記したのであろうか。

その背景として、中国では、儒教倫理を体現した婦女に対する旌表制度があった。旌表制度とは、儒教倫理観を守る婦女を表彰することである。婦女旌表制度では、夫や婚約者がなくなった後も節を守ること「貞節」と夫あるいは婚約者が亡くなった後に、貞操が守れなくなった時に、自分の命を犠牲にする「烈節」がある¹⁴。

冊封使における「大城崩」のをなぢやらは、旌表制度における「貞節」であり、継子を生かすために、実子を犠牲にするような「賢婦」として表象されたのではないだろうか。

中国における継子と継母の関係が家族間における深刻な問題を引き起こしていた事情があったからであろう。演戯故事や冊封使録でも、大城若按司が、継子いじめが「世俗での通弊」となっている¹⁵としている。

前述した継子と継母のトラブルは、中国でも家族間における大きな問題であった。水越知は、近世中国における親子間の訴訟に関する論考において、時代差はあるが、清朝の同治年間（1862～74）において、原告が親である場合には、子が実子か継子であるかを慎重に調査している。もし、継子である場合には、母親の虚偽の告訴の可能性が高いため、慎重に審理を行っていたことが指摘されている¹⁶。水越の指摘からも、清代においても継母・継子の関係は訴訟まで発展するような実態がある社会問題化していたのである。また、官吏として、継母の告訴があった際に慎重に審理を行うのは、実態として、継子への差別やいじめの問題が横行していたとも考えられる。

よって、「大城崩」では、儒教倫理観の「忠」「孝」のみならず、継母が継子を守るためにとったのをなぢやらの行動が冊封使にとって、「賢婦」として表象したと考えられる。

第5章 漢文訳された組踊「伏山報讐忠孝両全（伏山敵討）」の概要

「伏山敵討」において、主人公である棚原若按司にとって「父」の仇であり、富盛大主には「君主」の仇である。このため、棚原若按司は親への「孝」、富盛大主は主君への「忠」を体現した人物として表象されている。

特に演戯故事の漢文訳では、母を説得する場面や富盛大主との再会の場で、棚原若按司で仇討ちの決意をしたことに「孝子」とであると述べている。富盛大主も敵方の天願が

¹⁴ 陳青鳳「清朝の婦女旌表制度について一節婦・烈女を中心に」九州大学文学部編『九州大学東洋史論集』第16号、東洋史研究会、1988.1、102頁。

¹⁵ 周煌「琉球国志略」においても、以下の通り記されている。

按司與普嘉眞曰俗皆愛所生而嫉前妻子

【按司と普嘉眞は、世間一般では、皆生まれた子を愛で、前妻の子を妬む。】

（周煌「琉球国志略」黄潤華 薛英編『國家圖書館藏琉球資料匯編（全三冊）』北京圖書館出版社、2000、1124—25頁。）

¹⁶ 水越知「中国近世における親子間訴訟」夫馬進編『中国訴訟社会史の研究』京都大学学術出版会、2011、191・196頁。

「君父」の敵であり、「不共戴天」であったため、「忠」「孝」を果たした人物として表象されている。さらに、「伏山敵討」の漢文訳の表題は「伏山報讐忠孝両全」となっており、山に伏して仇を討った。よって若按司は「孝」を、さらに臣下の富盛大主が「忠」を体現した人物として「両全」が成立していることがわかる。

したがって、冊封使に儒教倫理観を強調し、琉球に伝播したことを理解させようとしたといえよう。

次に、「伏山敵討」の組踊台本の詞章と演戯故事の漢文訳との比較から、現代の演出との差異に関して検討する。その結果演戯故事の漢文訳の場面構成と組踊台本の詞章との構成が前後した部分がみられる。また、組踊台本では歌の歌詞として記されているが、演戯故事では母の詞章として記されているなどの差異がある。この演戯故事と組踊台本との差異は、まず組踊台本の底本である久志公民館所蔵本は1893（明治26）年が最も古い台本である。一方、演戯故事は1866（同治5）年となっており、琉球王国末期となっている。

そのため、近代以降と近世末期の演出の際の可能性もある。よって、時代差があるため一概には言えないが、今後組踊を検討する上で、他の台本との校合なども含め「伏山敵討」の演出を見直す必要があるだろう。

また、「伏山敵討」を創作するにあたりどのような「故事」をもとにしたのか。まず組踊に登場人物の按司の名前として登場する「棚原」と「天願」との関係性に関して検討した。推論の域は脱せないが、「棚原」は本来浦添間切の領域であり、その豊かな様子はおもろさうしによって記されている。「天願」も同様に天願ノロのもとに集まる按司の様子がおもろさうしに記されている。推論の域は脱しないが、「棚原」と「天願」ともに有力な按司同士の争いのように見えると思われる。しかし、管見の限りそのような按司同士の争いを示すような伝承などは見られない。

他にも、天願按司が臣下らを引き連れて狩りをして遊ぶ場面が見られる。こうした按司が狩りをして遊ぶ内容は、近世に八重山で行っていた事例などから考えれば、当時の琉球の社会状況を盛り込んで組踊を創作していたことがわかる。

したがって、組踊の創作にあたり近世以前の琉球の「故事」的要素と近世琉球における社会的な要素と前述した儒教的表現が加わり、組踊が創作されていたことがわかる。それらの内容を冊封使に見せることで儒教的表現のみならず、琉球における按司同士の争いや近世琉球期の猪狩りの様子などを加えて組踊を創作した上で漢訳し、「演戯」していたことがわかる。

第一部 小結

以上、演戯故事の記述について、「仇討物」5番について検討した。

まず、「仇討物」における仇討ちを行う人物の表象に関する検討を行った。「二童敵討」「伏山敵討」では、仇討ちを行う人物が主人公である。首尾良く仇を討っている。しかし、「大

川敵討」の主人公は村原のひやの妻乙樽である。乙樽は敵陣に乗り込み、内部から瓦解させるような役割を行った。乙樽はその後、最終的に村原のひやに首尾良く仇を討つように功を立てた人物が主役となっている。

一方で「大城崩」において仇討を計画する人物は、普嘉真（外間の子）である。普嘉真は大城按司の寵臣である。大里按司により大城按司を滅ぼされてしまう。その際に、大城若按司と大城按司の夫人と共に逃げ延びた。その後、大里按司が鮫川按司によって滅ぼされるが、大里按司の夫人と子どもが逃げ延びたため、普嘉真は大里按司の夫人と子どもたちを討とうとする。しかし、普嘉真はをなぢやらが子を助けるために実子を犠牲にし継子を守ろうとする姿に感銘を受け和睦へ向かう。

「義臣物語」でも仇討ちを計画した人物は、国吉庇椰（国吉のひや）である。国吉は、兼城郡司（高嶺按司）の元臣下であった。兼城郡司が民に対する政治を行わず、遊興に耽ることを諫言していた。しかし、兼城郡司は聞き入れず国吉を罷免した。その後、東平按司（鮫川按司）によって滅ぼされる。そのことを知った国吉は東平討伐のため、仇討ちを行おうとするが、失敗に終わる。しかし、東平按司は国吉の主君を思う姿に感銘を受け、高嶺按司の息子や娘を殺すことなく和睦へ向かう内容となっている。「大城崩」「義臣物語」は仇討ちを計画している人物は登場するが、敵の行った行為に心打たれる。あるいは自らの行為が敵方の主君を感動させ和睦へと向かう内容となっている。

組踊の仇討物で共通しているのは、「君父之仇」ということである。池宮が指摘している様に仇討物が儒教において父親の仇を子が討つことを重要な徳目として記されていた¹⁷。

よって、仇討物は全て儒教倫理によって始まり、首尾良く仇を討つ構成と様々な登場人物の儒教倫理観を体現する行為に感動し和睦へ向かう構成に別れていることがわかる。

また、組踊に仇討物が多く見られるのは演戯故事に漢訳する際、王府は冊封使に儒教倫理が琉球に浸透していることを示すためにもこうした内容が冊封使にとって分かりやすいと考えたのではないだろうか。

一方、和睦へ向かう仇討物は仇討を行う人物のみならず、既に敵方の按司はすでに殺されていることを条件として、敵方などの登場人物にも儒教倫理観を体現した人物がいることで、敵方に感銘を受け、許す内容へと向かっている。それにより、王府は組踊の仇討物の構成を多様にし、冊封使に飽きずに見せかつ儒教倫理観が琉球で影響していることを示そうとしていたことが明らかになるであろう。

演戯故事に記された組踊の「仇討物」の主人公は「忠」「孝」「烈女」などの人物表象がなされている。また、主人公以外の人物であっても主人公の仇討ちを後押しする内容や仇討ちの成功に導く役割が行われている。

冠船芸能における「仇討物」では、先行研究で指摘されている主人公のみの「忠」「孝」

¹⁷ 池宮正治「祭祀（神歌・儀礼・のろ制度）と文学のなかの女性」豊見山和行編『琉球・沖縄史の世界』吉川弘文館、2003、204頁。

の論理のみならず、周辺の人物も儒教倫理観を体現した人物が表象されていることが分かる。

したがって、「仇討物」における単なる首尾良く仇を討つ人物表象のみならず、周辺の登場人物にも「兄弟」や「家族」「君臣」の間での儒教倫理をもった人物表象が随所に見られる。これにより、冊封使に対し組踊を通して儒教を受容していることをアピールしていることがわかる。

・第二部 漢文訳された「世話物」の概要

第二部では漢文訳された組踊の「世話物」5番（第6章「孝行の巻」、第7章「銘苺子」、第8章「女物狂」、第9章「花売の縁」、第10章「雪払い」）をまず演目毎に検討した。ここでは、漢文訳された「世話物」5番において、作品の特徴を述べた上で通底する主題が何か分析した上で、冠船芸能における組踊の「世話物」をどのように見せようとしたのか検討する。

第6章 漢文訳された組踊「孝感除蛟姉弟興家（孝行の巻）」の概要

「孝行の巻」に関して、まず、演戯故事の冒頭の文章と組踊台本の詞章から比較した。演戯故事では組踊で登場しない義本王が登場し、義本王の風水害による不作に対する為政者としての国家の安泰や穀物の豊作をすることが出来ない「不徳」（自責の念に堪えきれない）の心情が表現されている。その後王府は、やむを得ず人民から生贄を募らなければならないような場面展開となっている。この内容は組踊台本にはない時代設定と内容が演戯故事に加筆され、中国の伝統的な為政者の儒教倫理が表現されている。

次に、宜野湾間切章氏姉弟（真鶴・思徳）に関して述べる。演戯故事・組踊台本との比較において生贄を誰にするか争う場では、双方に母に対する「孝」を尽くそうとしていることで一致している。しかし、姉弟で意見が分かれる内容として、弟の思徳は、姉を生贄にしないために幼さや母を世話するには姉が相応しいと主張する。姉は弟が男性であるために家を継ぐことのできる唯一の人物であることや自ら生贄になるとしている。ここでも儒教思想の観点から家督を継ぐのが男子であるため、弟であっても姉が家を継がせることを重要視している。ここでも女性として家督を継げる弟を遺して生贄に行く姿は儒教における女性の倫理観において重要な人物として表象されたといえよう。

こうした真鶴の母に対する「孝」などが神の感動するところとなり蛟を滅ぼしたことで国に対する「忠」と親に対する「孝」が大きく表象されている。また、家を継がせるために弟を生贄にするわけには行かないとする判断ができることも冊封使にとって、儒教を受容した人物像として重要であったのではないかと思われる。

したがって、演戯故事における「孝行の巻」は、為政者としての儒教倫理観や家族の儒教倫理に至るまで細かく描写されており、組踊台本には現れない部分まで漢訳されていたことがわかる。

第7章 漢文訳された組踊「天縁奇遇児女承慶（銘苺子）」の概要

「銘苺子」において演戯故事にある儒教倫理に関する記述は、銘苺子あるいは天女が子に対し、父の側で身を尽くすことや首里と按司へのご奉公をし、孝行する様に言っている内容のみである。このため、池宮の指摘は一見妥当なように見える。しかし、「銘苺子」における演戯故事の内容と組踊台本の詞章を比較し検討すると、銘苺子と天女が出会った松と泉が万物を生み出す場所と銘苺子の家の方角が「東南」にあることから『易経』における万物が生まれる場所であることから演戯故事で家から泉と松のある場所がなぜ東南にあるのかを指摘した。

また、万物の根源としての「陰陽」の論理を「男女」に置き換えれば、銘苺子と天女が出会って後、二人の子供が生まれる。よって、「銘苺子」は儒教あるいは中国的なの論理に則して構成されていることがわかる。

他にも「銘苺子」では、母が天女であることから姉弟を宮廷内で取り立てる内容である。この内容は、前述した羽衣説話と王府との関わりがあるように見える。王府が編纂した『中山世譜』で、天女や銘苺子と関連する記述は、尚真王の妃が銘苺子の娘などあるように国王の出自に関わる内容が登場する¹⁸。このため、王府の「正史」からは天と王府との繋がりを示すような内容がある。

清朝においても、天人女房譚による女真族の開闢説話が記されている。松村潤は、女真族の開闢神話に、一人の神が鵲の姿でブクリ山に三人の娘を降ろした。ある日三人の娘が沐浴をしていると、末娘が赤い実を見つけてそれを食べると一人の男児を産んだ。その男児はブクリヨンソンといい、女真族の祖であるという内容が清朝の満文により記された内国史檔案の中で記されたことを指摘している¹⁹。このように、清朝の開闢説話でも「銘苺子」と同様に天と王朝との繋がりをしめす内容があったことがわかる。

したがって、琉球側は冠船芸能に関わる冠船躍方は舞台上で組踊台本を駆使して「国劇」を演じ、儒教を「恭順」に受け入れているのかを伝えている。また、演戯故事の編集や書写に携わる久米村方はその「国劇」を漢文訳した解説書に儒教思想というエッセンスを加えて冊封使に呈上した。このことから、冊封使歓待にかける琉球王国の清朝に対するイメージ戦略が垣間見える。それ以外にも、王朝と天との繋がりが女真族の説話にも見られることも注目すべきであろう。

次に、「銘苺子」における登場人物の所作や表現の差異から演出を検討した。演出の差異に関して、まず演戯故事の記述に関して「泣く」や「喜ぶ」という表現が記されている。組踊の演出では悲しさを表現する際、歌が歌われると同時に、顔をうつむける所作を行う。これにより、泣くという表現が成立する。

「喜ぶ」という演戯故事の記述においても、実際に笑うという表現を舞台上では行わ

¹⁸ 鄭秉哲編「中山世譜」1743 初出（伊波普猷 東恩納寛惇 横山重編『琉球史料叢書』四、井上書房、1962 所収。）

¹⁹ 松村 潤『清朝開国説話再考』二松学舎大学編『二松学舎大学人文論叢』第 61 号、二松学舎大学、1998.10。

ず、両手を挙げて、喜びを表現することがある。このため、「銘苺子」においても舞台上で表現されない感情を演戯故事の記述により補完する役割があったと考えられる。

他にも、演戯故事にのみ記されている所作や人物、演出などが記されている部分がある。まず、演戯故事において銘苺子は蔵の中へ隠した事がすでに記されている。天女昇天の場面では、羽衣を着て何度も昇天を試みようとしたことや部屋の奥にしまってあった羽衣を着て昇天する内容が記されている。

組踊台本において継承されている演出では天女は子供達が歌う子守歌によって、蔵に羽衣を隠していることを知る。その後、子供達への思い入れをした後に羽衣と天冠に着替えるという演出となっている。このため、演戯故事と照合して考えると現代において継承されている組踊の演出に相違が見られる。

したがって、演戯故事や組踊台本等を検証した上で、冠船芸能に供された組踊を「復元」するにあたり、演戯故事に記されている所作なども検討し「復元」を行う必要があると考える。このように、冠船芸能に供された組踊「銘苺子」を検討する際に、演戯故事における組踊台本との異同を基に、現代における組踊の演出を再検討すべきであろう。

第8章 漢文訳された組踊「児被賊劫狂婦苦尋（女物狂）」の概要

「女物狂」に関して、演戯故事によって加筆された地名や場所、登場人物の心情表現や思考などから検討した。まず、演戯故事に加筆された記述は狂女が観音に助けを請う行為がみられる。中国の民間信仰における観音は女性救済の役割などから中国的な要素として取り上げられるのではないだろうか。また、「女物狂」に登場する首里からの偽の人相書から、近世日本の人相書と組踊台本の「覚」、演戯故事の檄文と清末の檔案史料にある人相書と比較するとその犯人の特徴などを書いた内容と類似していることがわかった。

このため、組踊の内容であるが、「故事」として実際の文書とほとんど変わらない内容を記すことで、リアリティーを追求していたことがわかる。

次に、「女物狂」において記された演戯故事の内容に関して、「故事」のリアリティーを追求する。男児が「首里赤田村董氏」の子として男児の出自が明確に記される。よって、首里士族の子とどこかの出自かわからない賊の身分と対照的になっている。また、賊が真亀で拐かした場所が琉球王国にとって「神聖」な場所である弁ヶ嶽であったことから、賊が子を拐かす異常な行為をより示していたのであろう。

さらに、賊と真亀が投宿した金武観音寺は周辺資料などから首里王府により罪人を寺入する際に指定された寺であることから首里王府と繋がり深い寺であることがわかった。そのことで池宮の指摘した組踊の主題となった首里王府の介入が大きく見られる場所が金武観音寺であることが演戯故事から知れよう。他にも金武観音寺は王府との繋がりを強調するほか狂女のと真亀が母親に会いたいという祈りが三ヶ月の時間はかかったが親子の再会へと向かう場所としても存在していることがわかる。

演戯故事により加筆された内容に関して、首里王府は真亀が賊に拐かされた後に、機転を利かして投宿していた寺の座主に助けを求める聡明な真亀の姿と狂婦になったとしても自らの息子を尋ね歩く母の子に対する慈しみを表象しようとする意図があった。

最後に、演戯故事に記された「女物狂」の表題である「児被賊劫狂婦苦尋」とあることから真亀が脅されて真亀の母が狂婦になって子を苦勞して尋ねている。その後の結果として、親子の再会が主題となっていることがわかる。

首里王府は冠船芸能において組踊を「国劇」として、冊封使に対して中国的表現に則した上で、舞台上でも演出し冊封使を歓待する芸能として供されたことが知れよう。演戯故事が組踊の内容においても中国的な要素を用いることで、琉球が中国からもたらされた文化を「教化」していることを示そうとしていたことがわかる。

したがって、演戯故事にのみ記されている台詞に関して、現代に継承されている組踊台本の演出と対照させると大きく異なっている部分があり、演出の変遷がみられる。そのため、演戯故事・組踊台本を対照させることで検討すべきであろう。

第9章 漢文訳された組踊「夫婦約別得財再合（花売の縁）」

「花売の縁」における演戯故事の漢訳は、組踊台本の詞章に則して行われていることから、演戯故事の内容については台本とほぼ同じ漢訳がなされている。しかし、漢訳が全て台本の詞章と一致するとは限らない。

薪木取が森川の子の歌う琉歌を歌う場面は、演戯故事では漢訳されていない。この部分は、あえて訳さなくても物語の展開の中で状況は理解できることから、冗長になることを避け、演戯故事では細やかな漢訳がなされなかったのであろう。

よって、舞台の音楽効果や立体的なビジュアルな表現を構築することを目指す組踊台本とは異なり、演戯故事は劇の筋を伝えることに重点を置く漢文の解説書であることから、情景描写にこのような差異が見られることがある。

「花売の縁」では、故事の本筋とは異なるが、猿引と猿が登場し、娯楽性を高めるシーンがセットされている。組踊は4、5ヶ月にも及ぶ長い冊封使の滞在中に举行される演劇の娯楽性が表れている。そのため、故事のあらすじのみを辿るのではなく、娯楽性も付加されている点も組踊の性質を知る上で重要である。

他にも「花売の縁」では十二年という歳月が流れても、ただ夫を思い、子を思う貞淑な女性として表象される。そのため、冊封使は「花売の縁」の乙樽に対し「女人の節義」を強く感じたであろう。

中国では「女人の節義」も重要視され、時に皇帝が節義ある女人を褒賞し、褒賞された家の前には、それを称える牌坊が建てられたりしていた。「花売の縁」を観劇した冊封使は、十二年という歳月が流れても、ただ夫を思い、子を思う貞淑な女性として表象される乙樽に「女人の節義」を強く感じたであろう。豊見山和行は「御教条」により、「女人の節義」として夫婦が最後まで添い遂げることと父子の関係をとり持つ関係が重

要であったと指摘している²⁰。組踊の中で、「花売の縁」は数少ない「女人の節義」を前面に押し出した作品であることにも注目したい。

「花売の縁」の中では下級無禄士族が王府内で奉職することができず「屋取人」に身を落とし、乳母となった妻の女手で家族が支えられるという貧しい実態を見せている。組踊「花売の縁」は、近世琉球における社会の「実態」と理想の「家族観」などの「脚色」を交えて上演されているといえよう。

第10章 漢文訳された組踊「継母妬忌女兒拂雪（「雪払い）」の概要

「雪払い」における演戯故事の漢訳は、組踊台本に記されていない、伊祖の子が妻である乙樽に対して、継子に「慈」をもって接するように言づけをしている内容がある。また、姉が弟の遺言としてむしろ母の側で孝を尽くしなさいと言う内容が演戯故事に記され、台本にはない「孝」がことさら強調されている。演戯故事では姉が弟に対して、家業を継いで、自ら名をあげることが孝子となると記されており、その具体的な内容として組踊台本では首里への御奉公をすることとしている。

首里への御奉公については、演戯故事には具体的に記しておらず、演戯故事に記されている組踊の世界と上演された舞台上で演じられた組踊台本の世界に一部差異がみられる。首里への御奉公については、上演の際に追記された可能性もあるが、この点については今後の研究課題としておきたい。

「雪払い」全体の内容に関して、継子いじめ譚に関する説話との比較や近世琉球の家族観を先行研究などから考察した。沖縄における継子いじめに関する説話は、継母の悪巧みに対する報いがあることで、悪巧みをしてはならないとする教訓譚であることがわかる。

一方で、組踊「雪払い」の内容は、前述した説話に比べて継子いじめや継母が戒められることも共通している。しかし、一家が和睦を行い、継子が継母にいじめられてもなお継母に対する継子の「孝」が表象されている。

「四本堂家礼」では継母・継子が不和であったとしても継子が孝を尽くすことで、継母が改心し、慈母となっていく。

よって、近世琉球の士族社会において継母・継子が不和となっても、継子が孝を尽くせば、継母が改心する儒教倫理観に基づいた家族の和睦をする様子が見受けられるであろう。

最後に、組踊「雪払い」と中国社会における家族観と戯曲との比較を行った。中国での継母に関する家族観は、特に前妻の子がいる男性に対し、後妻を設けることを慎重にすべきとする様子が見られる。また、継母の継子いじめがあった状況が『清史稿』で記されていることなどから、継母・継子の不和の状況は清朝でも社会問題となっていたと

²⁰ 豊見山和行「前近代琉球の家族・夫婦・親子をめぐる権力関係」喜納育江編『沖縄ジェンダー学1 「伝統」へのアプローチ』大月書店、2014、62頁。

考えられる。その一方で、「二十四孝」を戯曲化した「王祥」が 1606（萬曆 34）年当時、琉球でも上演され、さらに演戯故事では中国の儒教倫理観である「孝」を強調した中国の戯曲「鞭打蘆花」とも多くの共通点をもっている。

したがって、作者が組踊「雪払い」を作成するにあたって、こうした孝に関わる中国の戯曲も参照したであろうことも指摘しておきたい。

第二部 小結

以上、組踊の「世話物」の主題は、儒教倫理観が中心になっていることと王府が強く関わっているとされている。しかし、「世話物」に関しては、演目によって登場人物の表象で儒教倫理観に基づく内容は全ての演目に見られるが全てが主題という訳ではなかったといえよう。他方、首里王府の権威が見いだせる内容に関しても、王府に対する孝養や権威に基づく主題が記されているが、全ての演目では見いだすことは出来ない。

しかし、組踊における「世話物」は主人公が困窮している状況や犯罪被害にあってしまうことなど様々な苦境に立たされている状況が記されている。これらの苦境に立たされた組踊の主人公は、様々な手段で乗り越えていこうとしている。その背景として琉球が災害や人々が貧困にあえぐ苦境など琉球王国の「実態」を見せる。その中で、儒教倫理観を実践する人物を王府が取り立て、人々の生活が好転させる様子からは王府が持つ「権威」の強さを見せようとするねらいがあったと思われる。

したがって、「世話物」では「仇討物」とは異なり当時の琉球の社会状況や家族観など身近な題材から儒教や中国的要素を加えて組踊を見せようとしていたと思われる。

・ 第三部 第 11 章 漢文訳された組踊「手水佳偶契如日月（手水の縁）」の概要

第三部では漢文訳された「恋愛物」として「手水の縁」を組踊台本の詞章との比較・考察し、冊封使に供された組踊として、琉球王府がどのように伝えようとしたのかを検討した。

演戯故事と組踊台本の詞章の比較を行った上で、盛小屋大主が感情的になり娘を処刑するよう臣下に命じる。しかし、臣下である志喜屋の大屋子と山口の西掟は盛小屋大主の命令ではありながらも、幼いころから見守ってきた玉津を殺すに忍びない気持ちが交錯していた。結果として、山戸の必死な懇願によって、玉津の命を預けることになる。

以上の事から、組踊「手水の縁」は単なる儒教倫理観を主題としていない。比嘉美代子は、「泊阿嘉」の乳母役と「手水の縁」の志喜屋大屋子と山口の西掟を重ね、「社会規範よりも人間の真心の方が優先され」²¹ という指摘している。

よって、臣下たちは主君の娘として見守ってきた玉津が山戸に抱く純粋な愛を貫くことに、儒教では「不義」とはいえる。しかし、どうしても玉津を救い出したいという「憐

²¹ 比嘉美代子「「泊阿嘉」の「つらね」と乳母（アンマー）についての一考察」沖縄文化協会編『沖縄文化』第 75 号、沖縄文化協会、1991.11、66 頁。

憫」の心がそこにはあったのであろう。

そのため、ただ儒教倫理に反しておらず、人として誰もが持っている「情」に訴えかけた上で、山戸と玉津が処刑されることなく、二人が結ばれる内容となっていることが知れよう。

組踊における「恋愛物」は「手水の縁」以外に、組踊台本調査により「恋愛物」と考えられる組踊として「仲村渠真嘉戸」や「花城金松」などが発見されている。その後、伝統組踊保存会や研究者たちの尽力によって、1997（平成9）年12月に「仲村渠真嘉戸」²²が復活上演されることになる²³。管見の限り、上述した「仲村渠真嘉戸」が演戯故事で漢文訳された記録は見られない。したがって、組踊の全体の数に比べて僅少ではあるが「恋愛物」が主題となっているものが発見されていることや演戯故事の漢文訳で「手水の縁」が見られることなどから、組踊の「恋愛物」は冠船芸能の舞台でタブーとされてきた従来の観点は甚だ疑問であることがわかった。

結語 演戯故事の史料的意义と今後の課題の概要

以上、演戯故事4篇に所収された漢文訳された組踊11番を対象に組踊台本の詞章との比較を行い、首里王府が冊封使に対しどのような意図で組踊を上演したのか検討した。

演戯故事・組踊台本の記述比較から演戯故事の記述の特徴やその手法から王府がどのように冠船芸能で上演された組踊を見せようとしたのか検討を行う。次に、組踊11番の内容などから首里王府は中国から来た冊封使にとって冠船芸能で上演された組踊とは何かを総体的に検討する。

一、 演戯故事の組踊の漢文訳と組踊台本の詞章

演戯故事と組踊台本の詞章との比較により演戯故事の組踊においてほぼ組踊台本の詞章に則した内容であることがわかる。その一方で、①演戯故事により加筆された内容②場面構成との前後が見られる。

このような漢文訳と詞章との異同による特徴からまず、加筆や前後した記述がどのような内容であるのか。その背景を検討する。

²² 「仲村渠真嘉戸」のあらすじは以下の通りである。

伊江島に住む美女・仲村渠真嘉戸は、伊平屋の若者・松金に恋焦がれ、船頭をお願いして伊平屋に渡る船に乗せてもらう。一方、伊平屋では松金が春の野遊びに出かけ、遠く伊江島を眺めて、まだ見ぬ噂の美女・真嘉戸に思いを馳せる。そこへ真嘉戸がやって来て、二人は天の引き合わせと喜ぶ。しかし喜びも束の間、家を出て二〇日余りも行方不明の真嘉戸を心配した両親は、占いで娘が伊平屋にいることを知り、使いの者を伊平屋へ渡し帰宅を促す。二人はいずれの再会を約束して別れていく。

（「仲村渠真嘉戸」について）国立劇場おきなわ調査養成課編『国立劇場おきなわ上演資料集〈四十一〉仲村渠真嘉戸』国立劇場おきなわ、2016.12、8頁。）

²³ 国立劇場おきなわ調査養成課編『国立劇場おきなわ上演資料集〈四十一〉仲村渠真嘉戸』国立劇場おきなわ、2016.12、3頁。

1、 漢文訳により加筆された組踊の内容

I、 組踊の冒頭より以前の内容の加筆

演戯故事では組踊を漢文訳するにあたり、組踊台本の詞章には記されていない内容が加筆されている。その加筆の特徴として組踊台本に描かれる前の内容を説明している事例がある。その例として、「大城崩」でも、昔、琉球国乱世の時代にいた暴君である大里按司が大城按司を滅ぼしたがその後、鮫川按司により殺された後に、大里按司の妻子は落ち延びたと記す。

それにより、演戯故事では冊封使に組踊の内容を理解させるにあたり、具体的に加筆された内容を通し、「忠臣」対「逆臣」、「暴君」と「賢君」との二項対立を示すための構成であることを明確化しようとした。仇討物の内容以外にも、「孝行の巻」では為政者としての「不徳」など儒教的な要素が加筆されたことがいえよう。

このように冠船芸能における組踊では、組踊台本より以前の内容を演戯故事に加筆することで冊封使に対して組踊台本の内容に理解を深める。また、冒頭の場面より前段の内容に関して、仇討物と孝行物である点からも、儒教の徳目を強調するために漢文訳として加筆し強調していたことが知れよう。

II、 組踊の上演された場面における演戯故事の加筆

次に、組踊台本の詞章を演戯故事の漢文訳により加筆された内容が見られる。加筆された内容の特徴として儒教的な要素を用いた記述が見られる。その演目としてあげられるのは「二童敵討」、「義臣物語」、「手水の縁」の3番である。

二童敵討では、組踊台本に登場しない「査国吉」による二童の仇討ちを後押しや母親は二童が仇討ち失敗した際に、首をくくって死ぬとする「烈婦」としての表象がある。

よって、仇討物における「忠孝」以外の儒教的要素も付加したことが演戯故事の内容からわかる。

他に「手水の縁」では、山戸が玉津に恋愛関係を迫る際に、万物の根源である「陰陽」を「男女」の論理に用いて、一緒になりたいとする表現となっている。この「手水の縁」の陰陽の論理は、「銘苺子」の演戯故事における漢文訳にも用いられている。

「孝行の巻」では義本王が登場し、真鶴が蛟に喰われること無く国の風水害から守ったことに対し、三司官と協議し、孝養の内容を決めるという演戯故事に残された場面がみられる。

このように、演戯故事の漢文訳では、組踊台本の詞章あるいは場面に加筆している。その大半に儒教的要素を漢訳により付加した内容が多く見られる。儒教的表現以外にも、「女物狂」や「孝行之巻」では、組踊台本の詞章に見られない地名や寺の名前、登場人物の出自が見られる。そのような内容からは故事の具体性がより深まる。こうした手法を用いて、「故事」としてのリアリティーを演戯故事で高めようとした可能性がある。

2、 組踊台本の場面構成との前後

演戯故事と組踊台本の詞章との比較をした際に、組踊台本の場面と前後する場面がみられる。ここでは、演戯故事の漢文訳と組踊台本の詞章との場面が前後している内容を検討する。そうした内容の記述が現れる演目として現れるのが、「伏山敵討」、「大城崩」、「孝行の巻」である。

「伏山敵討」において、組踊台本では棚原若按司とその臣下である国吉のひやとの再会の場からの展開では、天願按司が猪狩りを行う場から棚原若按司が国吉のひやに長刀の武術を見せる場へと展開していく。しかし、演戯故事の漢文訳では、上述した再会の場から長刀の武術を披露する場へ、その後に天願按司の猪狩りを行う場面へと変更している。などがみられる。

また「大城崩」では、をなぢやらが二人の子を助けるため外間の子へ赦してもらえよう請う場面がある。外間の子が急ぎ殺そうとをなぢやらの提案を却下した後に、大城若按司は二人を殺さず長子をすぐ殺し、次子を母と共に島流しにして、しばらく育った後に処刑するように言う。しかし、をなぢやらは大城若按司の提案に反対する。長子は継子であるため、実子である次子を処刑し、長子を活かしてもらうように請う。大城若按司はをなぢやらの行為に感激する内容となっている。

一方で、演戯故事の内容はをなぢやらが二人の子を赦してほしいと懇願する。次に、外間が長子を殺し次子はをなぢやらと共に島流しとしたのちに、殺すことを提案する。その後、をなぢやらがならば長子を赦すようにと願い、大城若按司にその理由を問われることなく、長子を救ってほしい組踊台本と同様に、長子は継子であるという理由を述べる。その行為に若按司が感動する内容となっている。

最後に「孝行の巻」では、組踊台本の詞章でおめなりとおめけりが落ち穂拾いをしている最中に、高札を見つける。その後、おめけりは高札に対して喜ぶ。おめなりはおめけりに喜ぶ理由を尋ねると、高札の内容を具体的に述べる。その一方で、演戯故事の漢文訳では、おめなりとおめけりが落ち穂拾いをしている最中、おめけりは「群衆」が高札を見ているのに気づく。そこで、檄文の内容を述べたのちに、喜ぶ内容が記されているなど場面構成に若干の異同が見られる。ここでの場面の前後は、台本の演出が変更された可能性がみられる。

3、 演戯故事の組踊の漢文訳と組踊の歌

組踊台本での歌において、演戯故事の漢文訳の特徴として、①登場人物の道中に関して、歌詞の大意を訳する②最後の歌の内容を漢文訳として大意で訳することがある。このように、組踊台本の歌詞の踊りで歌われた歌詞はほとんど逐語訳されず、大意での翻訳あるいは略述され、台本に則して漢文訳が逐語訳されない。

I、道行き「歌」と漢文訳

まず、組踊台本の歌と演戯故事の漢文訳の特徴として、仇討物においては、敵方が所在する場所（敵方の城あるいは遊びに行った場所など）を示し、向かっている様子あるいはどのような心情かなどを示す場面がある。

世話物においては、前述した道行きもあるが、演戯故事の漢文訳では登場人物の所作や心情が地の文で記されている。その内容と連動する形で組踊台本の歌はその心情を曲や歌詞などで表現している。演戯故事での鑑賞においては、登場人物が歩み行く様子を加える様に音楽や所作により、その心情や雰囲気演出していたであろう。その際に、どのような状況下を簡略してはいるが演戯故事で大意として訳することで、舞台上の演出に注目させようとする仕掛けがあったと思われる。

II、終幕に歌われる「歌」と漢文訳

組踊台本の演出では、終幕に必ず地謡が歌を歌う。その際に、登場人物が舞台から「歩み」のみで退場するあるいは歌に乗せて踊り舞台から退場することが「キマリ」となっている。演戯故事の漢文訳では仇を首尾良く討ったこと、あるいは家族との再会、王府からのお取り立てなどを行ったことへの感謝や喜びを表現して帰る記述が多い。

一方で、組踊台本の詞章では、必ず歌が歌われるがその曲調は別れや道行きの場面と比べ明るく表現されている。このため、前項でも述べたように、演戯故事での漢文訳では登場人物の心情や道行きの際には簡単に略述し、歌や踊りなどの舞台上の表現を重視して見せることで、冠船芸能を冊封使に堪能させようとする意図があったといえよう。

まとめ

以上のことから、演戯故事の漢文訳や組踊台本の詞章との比較により、演戯故事については、加筆された内容や場面構成の異同などから、首里王府が冊封使に対して組踊の内容理解を深めるのと同時に、地名や登場人物の出自の加筆などから組踊の故事に具体性を持たせようとしていたことがわかる。次に、組踊の登場人物は特に組踊の主題としている儒教倫理観の「忠」「孝」「烈女」などを表象することを強調する際に加筆することがあることがわかる。

次に、組踊の歌と演戯故事との漢文訳との関係に関して検討した。ここで漢文訳された組踊の歌は大意のみで簡単に漢文訳されていたことを述べた。なぜこのように組踊台本の歌を全文漢文訳しなかったのであろうか。

まず、組踊台本の詞章と歌との違いがあると考えられる。組踊台本の詞章は原則的に八・八・八・六音の琉歌の音数律であるが、間の者の台詞や切迫した場面などがあり、その例外も多く見られる。このため、組踊台本の詞章を漢文訳する際には、散文で書かれている。

一方で、組踊台本の歌は八・八・八・六音あるいは七・五・八・六音などの琉歌の音

数律である。また、演戯故事の漢文訳において琉球舞踊の歌詞の漢文訳は、1曲につき「一行七字に二句」²⁴という原則に基づいて行われており、一部漢詩風に訳されていた。このため、琉球舞踊の歌詞の漢文訳の音数律で漢詩風に訳することは高度な漢文訳の技術を要したと推測される。こうした琉球舞踊の一部漢詩訳された内容についても、今後どのように訳されたのかを検討することは課題である。

また、組踊の場面において、台本の歌や踊りは舞台上では重要な役割を果たしているが、物語の本筋とは離れた内容も歌われている場合も多くある。そのため、演戯故事によって逐語訳するとかえって、観劇の支障となったことも指摘できる。

したがって、演戯故事で組踊の歌の漢文訳は、物語の本筋と関連する際には登場人物の心情や道行きに歌われた歌は大意のみ訳され、一方で、物語とは関係の無い歌詞の漢文訳は避け、或いは、漢訳は物語の展開に則した略式化した形で行われていた。

舞台上で演じられる組踊の「歌」と「踊り」そのものは演戯故事においては表現できない。演戯故事に漢文訳されない部分は冊封使を舞台に注目させるための演戯故事の漢文訳の手法であったとも言える。逆に、「漢文訳されない」部分が、冠船芸能の場での組踊を「見る」「聴く」にあたり重要であったとも考えられる。そのため、漢文訳が行われていない部分は、一部台本に示されるように組踊の内容として本筋を離れていたとしても、舞台上でしか味わえない最大の聴かせどころや見せどころであったといえよう。

二、 演戯故事の組踊の漢文訳に見る首里王府の対清戦略

ここでは、前節で述べた演戯故事における漢文訳された組踊について、加筆あるいは組踊全体の作品から冊封使はどのような情報を得ていたのか。また、首里王府は冠船芸能における組踊からどのようなことを清国の使者である冊封使に伝えたのかを検討する。

最後に、前述した組踊が演戯故事に漢文訳された際の記述の特徴などを踏まえて、冠船芸能で演じられた組踊とは冊封使に何を伝えようとしたのかをまとめる。

1、 中国的要素を強調した組踊

組踊における登場人物の表象が冊封使に対してどのような影響を与えたのか。演戯故事の記述の特徴などから考察する。

演技故事に加筆した内容を通して、首里王府はどのようなことを企図したか。また、それが冊封使に対してどのように伝わったのかを検討していく。演戯故事の多くが、組踊を漢文訳する際に、「昔」や「往昔」などのように上演されていた時代の話ではないという事を前提としている。また、主要な登場人物に関しては、どのような出自であるか、どのような場所にいるのかを書き込んでいる。それにより、仇討物では二項対立を

²⁴ 池宮正治「首里城の舞台に供された組踊と知られざる組踊」琉球大学法文学部編『日本東洋文化論集』第7号、2001.3、19頁。

もたらし、世話物では主人公がどのような苦境あるいは境遇にあるかを理解させていた。

「手水の縁」は恋愛もので他の組踊と内容が異なっているが、演戯故事では当初二人の出会いからはじまり、親に露見してしまい窮地へと追い込まれる経緯が写實的に記されている。

これらの苦境に立たされた組踊の主人公は、様々な手段で乗り越えていこうとする。まず、直接的な障害となっている敵を倒すために、親や臣下の支えなどによって自ら乗り越え、次に、主人公は自ら苦しい状況を脱却するために、自らを犠牲にしようとする。最後に、主人公以外に見守っていた周辺の人物の情がわき和睦や一家団欒をする結末へ向かっている。そうした組踊の内容においても、中国から伝播してきた儒教倫理などの要素が組み込まれている。そうした人物の表象や場面を通して、中国からもたらされた儒教が琉球ほどのくらい受容していたかを具体的に示している。

中国における冊封は二種あり、一つは「領封」もう一つは「頒封」である。「領封」は冊封使を派遣せず、中国国内で属国から派遣された使節に「勅書」を渡す冊封儀礼で、「頒封」は直接冊封使を属国に派遣し、王位即位の式典を自らが取り仕切り、直接新国王に勅書を手渡す冊封儀礼である。「頒封」を採用したのは、属国として重視した朝鮮、琉球、ベトナムなどである。

冊封が実施される度に、王府は常に琉球が宗主国中国に対して中国文化を受容した恭順な国家であることを示すことに意を尽くし、冊封は王府にとって重要な政治的儀礼となっていた。中国も冊封体制下において、属国に対しては中華世界の「大同」、つまり中国の儒教倫理の浸透を強く望んでいた。組踊はそうした時代背景のもとで創作された戯曲であることに、まず留意しなければならない。演戯故事には、琉球が清国に対して、儒教を恭順に受け入れていることを示し、華夷秩序の中の琉球であることを強く示そうとする王府の政治的企図がうかがえる。

組踊は琉球語で演じられていたが、その創作にあたっては、琉球国内での様々な「故事」を用い、琉球独自の伝説や史実などをモチーフとして、様々な手法で中国からもたらされた儒教文化を属国である琉球が受容している様子をアピールしていたこと窺える。

2、「故事」で中国にみせた琉球王国一仇討物・世話物・恋愛物の組踊の検討から一
組踊の中には、琉球王国の「故事」を題材にして、社会や人々の苦しい状況を示しているものが多い。組踊の主人公が、災害や下級士族として落ちぶれた屋取人、貧困などの苦境や不遇に立たされているものもある。

こうした「故事」は組踊にどのように取り入れられたのか。田名真之は17世紀末から18世紀中葉にかけて琉球王国の諸書が編纂され、「琉球の為政者が王国の歴史を初めて整理し、王国の主体性を表明した」²⁵と指摘している。特に組踊が初演された1719

²⁵ 田名真之「自立への模索」豊見山和行編『琉球・沖縄史の世界』吉川弘文館、2003、186頁。

(康熙 58) 年前後には、1696 (康熙 35) 年に『中山世譜』、1710 (康熙 49) 年の『おもろさうし』の再編集、1711 (康熙 50) 年の『混効驗集』、1713 (康熙 52) 年には『琉球国由来記』等の多くの書籍が編纂される。それにより組踊は、王府が編纂した史書に記された内容を創作の題材として採用し戯曲として組踊が創作していったと考えられる。

演戯故事の漢文訳では、組踊が琉球の故事を題材としたことから、前書きで「往昔」あるいは「昔」などと明記されている。演戯故事では、そのような形で琉球の社会的な問題や事象を見事に戯曲の中で組み込んでいる。

以下、冠船芸能における組踊は前述した儒教倫理観以外に琉球の「故事」から冊封使に何を示そうとしたのか、「仇討物」・「世話物」・「恋愛物」を通して検討する。

I、 冠船芸能で上演された「仇討物」－「仇討物」における中山を中心に－ ①「仇討」の舞台としての「中山」

まず、「仇討物」において、首里王府が冠船芸能における「仇討物」を通して、何を伝えようとしたのかを考察する。

「伏山敵討」では、利をむさぼろうとする天願按司が、安定して棚原村を運営していた棚原按司を侵攻している。ここでの「天願」と「棚原」は中山の領土内であり、「中山」の内乱であったといえる。その中で、棚原若按司は、天願按司による棚原按司への侵攻により、「首里城」が天願を討とうとしていることを噂に聞く。ここでも、「首里城」つまり中山国王が天願討伐を計画し、「首里」が「天願」の上位にあり、天願を攻め滅ぼす能力を持っていることを示している。物語の展開では、棚原若按司が首里よりも早く天願を討伐したいとする意志を述べた後に、棚原の「忠臣」である富盛大主と再会して、「首里城」よりも討伐を果たし、忠臣として棚原若按司と富盛大主が「中山」によって賞賛・表象されている。

② 他地域へ介入する「中山」

「仇討物」においては、「中山」が他地域へ介入する内容が冠船芸能における組踊で記されているものがある。「義臣物語」において、演戯故事の漢文訳では冒頭に東平按司による兼城郡司討伐が行われている。一方で、兼城郡司の妻子が逃げ延びたことが記されている。この内容から「東平」や「兼城」という地域は、「南山」の内乱の題材として扱われている。組踊台本では、國吉のひやの詞章で高嶺按司が攻められた際の様子について「きのふ暁や首里軍押寄て」²⁶となっており、「首里軍」が高嶺按司を押し寄せて攻め滅ぼしたことがわかる。

「大城崩」ではまず大里按司が悪欲を働かせて、財力が豊富で人民からも人気のあつ

²⁶ 鈴木耕太「尚家旧蔵〈組踊集〉一翻訳と注釈一(下)」沖縄県立芸術大学編『沖縄県立芸術大学附属研究所紀要沖縄芸術の科学』第23号、2011.3、1(188)頁。

た大城按司を滅ぼす。その後、大里按司は鮫川按司によって滅ぼされる。ここでいう「鮫川」の名称に関しては、尚巴志の祖父である「佐銘川大主」と類似している。「中山」によって「南山」に介入したような状況を想起させる。

演戯故事に記された組踊の「仇討物」5番を通して、「仇討物」の仇打ちは、全て儒教倫理観に基づいて、池宮正治・大城學が指摘しているように、「忠」「孝」の論理により行われている。それ故、儒教倫理に関して敵、味方を問わずに儒教的徳目を表象した人物がいたことがわかる。「仇討物」では様々な立場の登場人物の儒教倫理観が描かれ、「忠」「孝」「義」「烈女」などといった中国の儒教的徳目を強く冊封使に印象づけたであろう。

上述したように、「仇討物」における「中山」では、首尾良く仇を討つ或いは和睦に向かう結末となっている。その上で、組踊において中山は必ず登場している。ここでの「中山」は、「首里」「鮫川」なども含まれており、王国「中山」を想起させる実在する地域名が頻出する。組踊の「仇討物」には「中山」をトップとして、各地域の内乱を鎮圧している王府の正統性あるいは現在の安定を描出が随所に見られる。

II、 冠船芸能で上演された「世話物」

次に、冠船芸能における組踊の「世話物」がどのように見せようとしたのかを検討する。「世話物」とは、庶民の生活などを題材に登場人物の心情や葛藤などを描いた内容である。このため、「世話物」の題材は多岐にわたる。まず「世話物」に見られる儒教倫理観がどのくらい表象されたのか。世話物における題材などを検討した上で、王府は冊封使に対して「世話物」を通して何を伝えようとしたのか検討する。

①「世話物」の題材

まず、組踊における「世話物」は士族や百姓の身分を問わず、様々な問題が発生し登場人物が色々な心情を描写し、行動することで幸福な結末を迎える。組踊において用いられる題材は多岐にわたる。

「孝行の巻」は、琉球国に蛟が悪さをして風水害をもたらしている窮状と主人公の父に先立たれ貧困にあえぐ母と子二人という中で、国家と家族の問題を描き出していた。次に、「銘苺子」は、銘苺子が貧しい農夫であった。その後、天女と出会い二人の子どもをもうけて暮らしていた。しかし、天女の昇天後、子ども達は母である天女を捜しに明け暮れてしまい、貧しさと家族の団欒が壊れた様子になる。「女物狂」では、男児が盗人に拐かされてしまい、金武観音寺まで連れて行かれてしまう。一方で母親は、一人で育ててきた男児を失い、狂女として気がふれてしまい、さまよい歩いてしまう状況が描かれている。「花売の縁」では、首里で暮らしていた森川の子と乙樽、鶴松の一家であったが、度重なる不幸によって一家が離散してしまう状況が描出されている。「雪払い」では、伊祖の子とその後妻、先妻との間に生まれた男児と女児がいるが、後妻が継

子である女兒をいじめる様子が描き出されている。

世話物では、家庭の貧困や家庭内不和、誘拐による行方不明、一家離散などのような状況が見られる。特に、本論で対象にした組踊では「家族」における問題が取り上げられている。そこで組踊の世話物ではこのような問題を如何に解決しようとしたのか。そこには、王府が憐恤を施す様子や権威の大きさを示して居る場合と前章で述べたように儒教倫理観に基づいて自力で奮闘している様子が世話物で記されている。

②「世話物」における問題解決—王府と儒教との関わりを中心に—

「孝行の巻」では、王府が風水害の蛟に対して生贄を募る。そこで生贄となった者には親族におよぶまで孝養するといった高札を立てる。その後、真鶴と思徳の姉弟がこのことを知り、国の為でなく、実際には母親と弟らを貧困から抜け出させるために生贄となろうとした。生贄の儀式が行われると、神が姉の孝行な行為に感動し、蛟を滅ぼし姉は生き残った。それにより、国の風水害が止みかつ姉が生き残った。王府は姉弟に対し、姉を王子の嫁にとり、弟は王の娘婿となることで孝養した。ここでは、姉弟は親に「孝」を尽くす人物として表象されている。特に姉は生贄になるが、神が現れて蛟を滅ぼしたことで国を救ったことで「忠」を体現した人物としても表象されたといえよう。したがって、主人公の儒教倫理のみならず、王府の孝養によって貧困が脱出したことがわかる。

「花売の縁」では、首里士族であった森川の子と妻乙樽、子鶴松の一家三人は、五、六年に様々な不幸が続いてしまい、首里で住めなくなる。そのため、森川の子は山原で下りて仕事をする。一方、妻の乙樽と子の鶴松の二手に分かれて家族が暮らすことになる。当初二、三年でどちらかの生計が上手くいけば一緒に暮らそうといったが十二年という歳月が過ぎる。その後、乙樽と鶴松は士族の乳母となり生計を二人でなんとか暮らし向きが良くなったので、夫を尋ねに遠く山原まで赴いた。一方で森川の子は働けどなかなか自分の暮らし向きが良くなかった。しかし、妻子が迎えに来てくれたことで一家団欒が復活する内容となっている。

「花売の縁」では前述した他の「世話物」とは異なり首里王府の権威を示すような内容は見られない。首里士族から不幸が続いてしまい、森川の子は山原まで行き「屋取人」として何とか生計を立てている様子などからは琉球王国時代の士族が増えてしまい、無禄の士族が増えてしまった問題が生じている内容を題材としている。その後、妻が乳母として生計をたててようやく家族一緒に暮らせる様子から王府の権威ではなく、一家団欒をするために自力で再建していることがわかる。

「雪払い」では、伊祖の子の後妻である乙樽は夫が公務で遠出していることをいいことに継子の思鶴に対するいじめを行い、雪の降り積もる中、思鶴の身ぐるみをはぎ取り、外へ追い出したことが描出される。その後、伊祖の子が公務で帰る途中で思鶴を見つけて、薄着で外にいることを怪しみ自宅へ帰る。自宅へ帰り伊祖の子は乙樽に思鶴の行方を尋ねると嘘をつく。すると、思鶴を乙樽の前に出した後に、伊祖の子は斬り殺そうと

する。すると、継子たちは母がいなくなると私たちはどうすればいいのか今後とも母に孝行を尽くしたいと説得する。伊祖の子は乙樽に継子たちへ虐めずに養育することを言付ける。乙樽も改心し、一家和睦へと向かう。ここでは、王府の権威などは見られないが、孝行を尽くす子ども達が儒教の「孝」を体現した人物として表象される。また、この「孝子」とされた子ども達や伊祖の子からの言づけによって、乙樽が継子いじめをしていた「悪心」を翻し、継子に「慈」を持つことを約束した様子にも、家庭内における儒教的要素の表現が強調されている。

以上のことから、「世話物」では家族を通して、儒教倫理観によって家庭内不和や貧しさを乗り越え、王府が取り立てたことによって脱出する姿や、王府の権威をかりて、離ればなれになった親子の再会へと展開したり、天人を女房にした者を、王府が取り立て貧困から脱け出したりする姿が多く描かれている。

世話物では儒教倫理観を強調した内容以外に、貧困の者を王府が取り立てるなど、王府の憐恤や権威を示す様子が描かれている。他には、首里士族の不幸が続いて士族が屋取人となった様子などからは、琉球王国における社会問題を題材としているものも見られる。

このような「世話物」では、貧困にあえぐ家庭の様子を描いたものが多いのも特徴であろう。その背景として、冠船芸能という場で冊封使に対して前述したような「儒教」の倫理観を強調する以外に、琉球が困窮した小国であることを冊封使に伝えようとした狙いがあった。

これにより、琉球は冠船芸能における組踊を通して、儒教倫理観を体現した登場人物の表象から清国皇帝の徳治主義を被っている様子を示す一方で、琉球王国の実態は貧しい小国としての姿を見せることを組踊においても見せていたのではないだろうか。

Ⅲ、 冠船芸能で上演された「恋愛物」

王府は冠船芸能で上演された「恋愛物」の「手水の縁」をどのように見せようとしたのかとりあげる。まず、「手水の縁」ではどのような内容が強調されているのか。そして、封建社会においてはタブーとされていた恋愛について近世日本・琉球・中国などから検討した。

①「恋愛物」において強調された内容

「手水の縁」の内容からは、山戸と玉津との恋愛模様が主題である。しかし、ここでは志喜屋の大屋子と山口の西掟は、玉津の父親に長年仕えており、幼い頃から玉津を見守ってきた二人である。特に処刑の場では、殺すに忍びないとする心情と主君への命とのはざままで揺れ動く葛藤を表現している。その中で、山戸からの懇願もあり玉津の命を山戸に預ける。玉津を生かすもう一つの理由として、玉津の家は一人娘であるため、ここで処刑にしてしまうと家が断絶する。その懸念も少なからずあったため、玉津を生か

すことで玉津の家を繋げるためにも生かしておいた方がよいという考えもあったのであろう。それはその後、二人の臣下が主君に対して憤りが治まった後説得する内容が記されていることからわかる。「手水の縁」は、後に主君に対して臣下が諫言して主君のために尽くす「忠臣」を尽くそうとする様子からも知れるように、全て恋愛物に傾倒している訳ではなく、儒教的な表現も垣間見える。では、近世社会における「恋愛」と「恋愛物」はどのように表出していたのであろうか。

②近世における「恋愛」と「恋愛物」

近世日本の「恋愛」に関して、森山豊明は「家父長制度的家制度や封建的身分制度を維持するために自由恋愛を法や刑罰で禁圧していた」²⁷ため、自由恋愛は不義密通として禁止されているとしている。しかし、森山は近世日本において18世紀以降、奉公人同士の間で自由結婚（馴合結婚）が現れ始めるとも指摘している。その背景には、①金銭によりによる身分制の弛緩と密通の解決②若者仲間の性の管理者としての地位失墜があったことや商業経済の発展に伴う女性の進出などがあるとしている。ただし、このような自由な結婚や恋愛が現れるのは庶民の身分であり、武士身分は封建的身分制度と家父長制度的家制度の制約があるため、みられなかったことも指摘している²⁸。

このため、近世の自由恋愛は制度上制約はされているが、制度の弛緩や様々な社会的な要因が起こることで人間の本来持っている恋心の発露することなどが徐々に現れた結果とみてもいいだろう。近世琉球社会における「恋愛」は近世日本のように歴史史料は見られない。しかし、文芸として琉歌などで「恋歌」が数多く見られる。ここでの「恋歌」に関して池宮正治は「文芸の上とはいえ、〈恋〉を実現するには遊女しかなかった。」としており、恋愛の贈答歌が成立したかは疑問を持つべきであり、あくまでも遊郭という社交の場でうたわれたものであると指摘している²⁹。しかし、身分制度の制限がありながらも遊びの一つに恋歌が詠まれた事実は存在していることも指摘しておきたい。

中国では、「恋愛」について如何に捉えていたのかを若干検討する。張競は中国における婚姻について班固の『白虎通徳論』をもとに、婚姻を結ぶ際には媒酌を行わなければ、男女ともに勝手に婚姻を結んではならないとされたことを指摘している³⁰。確かに、漢代においては、媒酌人を介して、親同士が子の婚姻を決めることが確立している。一方、元代など異民族が流入し統治する時代を経ることで、前述したような儒教的な様式から外れた「恋愛」が流入する。それにより、小説や戯曲でも「恋愛」の要素を取り込んだものが増える。こうした中国の時代的変遷から儒教的な観念により、制度的には自由恋愛は出来ないまでも文学作品により「恋愛」を楽しむようになったことがあったことも、

²⁷ 森山豊明『不義密通と近世の性民俗』同成社、2012、177頁。

²⁸ 森山豊明『不義密通と近世の性民俗』同成社、2012、174頁。

²⁹ 池宮正治「祭祀（神歌・儀礼・のろ制度）と文学のなかの女性」豊見山和行編『琉球・沖縄史の世界』吉川弘文館、2003、213頁。

³⁰ 張競『恋の中国文明史』筑摩書房、1997、30頁。

張競は指摘している³¹。他にも前述したように劉は「手水の縁」と類似した中国戯曲があることを指摘している³²。「恋愛物」である「手水の縁」は冠船芸能として披露することは禁じられて居らず、むしろ冊封使にとっても寛容に受け入れられていたと考える。

中国と琉球との関係において、1822（道光2）年12月29日に紫禁城にある重華宮で清朝皇帝と共に琉球の進貢使節などは「冥判」を観劇していたことがわかる³³。「冥判」とは湯頭祖が著した『牡丹亭還魂記』³⁴の第23齣にあたるもので、主人公の恋人役である杜麗娘が恋煩いのために他界し、冥界での判官の裁きに欠けられる。判官は杜麗娘に死因を問うと、南安府の後花園で秀才である恋い焦がれた男性が一人現れ、一篇の詩を作るように願ったところ詩を書いた後に亡くなったことを告げる。その真偽を確かめるべく判官は花神を連れてくるよう命じた。花神は判官に対してその真偽を問えば、亡くなったのは事実であることを述べる。判官は杜麗娘が男に恋い焦がれ花園で死んだことから、花間の四友（蝶・蜂・燕・鶯）のどちらかに生まれ変えることを命じた。しかし、花神はこの女の亡者は夢の中での男性に恋い焦がれていただけであるとし、また、父親も役人として清廉潔白な人物で麗娘は一人娘のため、寛大な処置をするよう求めた。その後、判官は再び審議した結果、杜麗娘を生き返らせ、両親の元へ戻るよう審判するといった内容である。

このように、清朝の宮廷演劇においても恋愛物が上演されており、中国社会では受容されていた。そのため、恋愛物を理由に「手水の縁」の上演を禁止する必要はなかった。

まとめ

冠船芸能で上演された組踊の仇討物・世話物・恋愛物に関して検討した。王府は冊封使に対し、琉球国内の様々な故事を駆使し組踊を創作している。その中では、儒教倫理観を体現する人物が存在し、また「忠」や「孝」のほか女性に登場人物には「烈女」として登場している者もいる。こうした儒教倫理観が戯曲としての組踊の中核に据えられていることはいうまでもない。

しかし一方、冠船芸能における組踊においては、上述したように冠船貿易を意識して冊封使に演劇故事・組踊台本を通して琉球の社会や貧しい様々な国ぶりなどの「実態」を示すこともなされている。そうした中で、組踊に登場する人物については、さまざま

³¹ 張競『恋の中国文明史』筑摩書房、1997。

³² 劉富琳『中国戯曲与琉球組舞』海峡文芸出版社、2001、160—161頁。

³³ 「道光二年 恩賞日記檔」1822（周和平主編『中國國家圖書館藏 清宮昇平署檔案集成』第1冊、中華書局、2011、482頁所収。）・「道光二年 恩賞日記」1822（周和平主編『中國國家圖書館藏 清宮昇平署檔案集成』第1冊、中華書局、2011、499—500・505頁所収。）陳 碩炫「清代琉球進貢使節派遣日程について」赤嶺 守 朱 徳蘭 謝 必震編『中国と琉球 人の移動を探る—明清時代を中心としたデータの構築と研究』彩流社、2013、68頁。

³⁴ 書生の柳夢梅と深窓の令嬢杜麗娘という才子佳人が主人公で、全五十五齣から成る。二人は夢の中で出会い契りを交わすが、女は恋いわずらいのため他界。三年後、亡霊となった女に頼まれて男が墓を発くと、女は現世に再生して二人はめでたく結ばれ、男も科挙に首席で及第する。（松原 朗 佐藤浩一 児島弘一郎著『教養のための中国古典文学史』研文出版、2010、205頁。）

な苦境に立たされながらも冊封使に対し「忠」「孝」以外に「烈女」など中国からもたらされた徳目をもとに、幸せな結末を迎える「脚色」がなされている。

また、王府は冊封使に対する歓待芸能において、主体的に組踊を創作するに当たり、琉球独自の「故事」として、琉球で起きた按司同士の抗争から屋取人にいたるまでの様々な題材を具体的に描き出している。それにより、王府は冊封使に対して忠孝を基軸に据えた「守礼を尽くす貧しい小国（属国）」のイメージづくりに意を尽くした。組踊は単なる観劇のためのアトラクションではない。組踊には、台本による芸術性に富んだ演出と漢文訳によって見せる組踊の場面などから、冊封使に訴える前述した王府のイメージ戦略が多く盛り込まれている。冠船芸能において「国劇」として組踊が成立した背景には、実は中華世界の中の属国としての王府の戦略的意図が含まれる点を見落としてはならない。

今後の課題

本論では、冠船芸能における組踊に関して、王府がどのようなことを冊封使に伝えようとしたのか、一定の結論を見出すことができた。しかし、本論はあくまでも冠船芸能で上演された組踊の「基礎的」研究である。また、組踊 11 番の演戯故事・組踊台本との内容比較が中心となり、全ての内容の異同については把握できているが、筆者の能力と時間の制約上、演戯故事・組踊台本における異同の背景について、その全てをクリアできたわけではない。特に歴史史料やその他の歌謡や伝承などの総合的な観点からの深い考察ができなかった。

今後の課題として、組踊の「故事」を検討する際には、演戯故事・組踊台本の内容を中心とした上で、さらに様々な史料や伝承などを駆使して、多様な視点から組踊を研究する必要がある。

組踊が、冊封使に対して琉球の様々な故事を紹介して琉球の国ぶりを表現する上で重要であったことは既述した。しかし、来琉してきた冊封使がどのように見たのかを知る上で、中国の故事や様々な戯曲との比較をすることも重要である。これらの本論が抱えた課題を解決できるように、今後、様々な観点から組踊を検討していきたい。

参考文献

【史料】

- ・「演戲故事」（1808、那覇市歴史博物館蔵、尚家文書第127号。）
- ・「改賜観音寺于聖家」1662（球陽研究会編『球陽』原文編 沖縄文化史料集成5、角川学芸出版、2011（1974年初版）。）
- ・「嘉慶拾九年より式拾壹年迄 御三代伊江親方日々記」1814～16（財団法人沖縄県文化振興会公文書館管理部史料編集室編『沖縄県史資料編7 伊江親方日々記』近世1 沖縄県教育委員会、1999所収。）
- ・夏子陽「使琉球録」1607（臺灣銀行經濟研究室編『臺灣文獻叢刊第二百八十七種 使琉球録三種』第二冊、中華書局、1970所収。）
- ・「元祖以来善行記」1815、琉球大学附属図書館蔵、上江洲家文書第3号。
- ・阮元「重栞宋本儀禮注疏附校勘記 用文選樓藏本校定」卷五士昏禮 1815（阮元校勘『重栞宋本十三經注疏附校勘記 用文選樓藏本校定』藝文印書館、1955所収。）
- ・「御教条」1732、琉球大学附属図書館蔵、阪卷・宝玲文庫（ハワイ大学所蔵）623c-1。
- ・「御財制」1728、（那覇市市民文化部歴史資料室編『那覇市史 近世資料補遺・雜纂』資料編第1卷12、那覇市役所、2004所収。）
- ・「始許士家繪師庖丁諸細工銀見船頭作事五主琉假屋手代」No.791（球陽研究会編『球陽』原文編、角川学芸出版、2011（1974初版）。）
- ・「寺社御規帳」1859（沖縄県立芸術大学附属研究所 芸術・文化学部門波照間永吉編『鎌倉芳太郎資料集（ノート篇）』第三卷歴史・文学、沖縄県立芸術大学附属研究所、2015所収。）
- ・周煌「琉球國志略」1757、黄潤華 薛英編『國家圖書館藏琉球資料匯編 中』北京圖書館出版社、2000。
- ・「取納座國頭方定手形」1826（小野武夫編『地方經濟史料』第十卷、吉川弘文館、1969所収。）
- ・「尚泰久王 五年阿摩和利讒害護佐丸」「球陽」卷二（球陽研究会編『球陽 原文編』角川書店、1974所収。）
- ・「尚泰久王 本年（二年）王遣大城等率軍馬征討勝連」「中山世譜」卷五、1725（伊波普猷 東恩納寛淳 横山 重編纂『琉球史料叢書』第四、井上書房、1962所収。）
- ・徐葆光「中山傳信録」1721、黄潤華 薛英編『國家圖書館藏琉球資料匯編 中』北京圖書館出版社、2000。
- ・「撰要永久録卷之貳」1665（法務大臣官房司法法制調査部監修『法典調査會 會議日誌 法典調査會 委員總會日誌 舊民法編纂沿革 法典調査規程 法典調査ノ方針議事規則等 書記執務心得 法典調査會員特別擔任年月調（甲、乙） 法典調査會總裁及委員 任免一覽表 聯合會日誌 撰要永久録 御觸留一』日本近代立法資料叢書28、商事法務研究会、1986所収。）

- ・「淡新檔案（二十七）刑事編」1878（吳密察主編『淡新檔案（二十七）刑事編』國立臺灣大學圖書館、2009 所収。）
- ・鄭秉哲編「中山世譜」1743 初出（伊波普猷 東恩納寛惇 横山重編『琉球史料叢書』四、井上書房、1962 所収。）
- ・「道光貳拾八申年八月吉日写 手水の縁」1848（多良間村教育委員会所蔵。）
- ・「道光二年 恩賞日記檔」1822（周和平主編『中國國家圖書館蔵 清宮昇平署檔案集成』第 1 冊、中華書局、2011 所収。）
- ・「道光二年 恩賞日記」1822（周和平主編『中國國家圖書館蔵 清宮昇平署檔案集成』第 1 冊、中華書局、2011 所収。）
- ・「今婦仁杣山方式」小野武夫編『近世地方經濟史料』第九卷、吉川弘文館、1978 所収。
- ・「伏山敵討」『組踊集』1893（久志公民館所蔵）（財団法人沖繩文化振興会編『沖繩県史料』前近代 11 芸能Ⅱ、沖繩県教育委員会、1998 所収。）
- ・「丙寅冊封諸宴演戲故事卷之九」1866（那覇市歴史博物館蔵、尚家文書第 248 号）
- ・「丙寅冊封那覇演戲故事卷之十一」1866（那覇市歴史博物館蔵、尚家文書第 250 号。）
- ・「戊戌冊封諸宴演戲故事卷之六」1838（那覇市歴史博物館蔵、尚家文書第 126 号。）
- ・「宮古島旧記」1870、沖繩県立図書館蔵（稲村賢敷『宮古島旧記並史歌集解』至言社、1977 所収。）
- ・「山奉行所公事帳」1751（立津春方『林政八書』東京図書、1937 所収。）
- ・李鼎元「使琉球記」1802、殷夢霞 賈貴榮 王冠編『國家圖書館蔵琉球資料續編上冊』北京図書館出版社、2002。
- ・「琉球科律」1786（崎浜秀明編『沖繩の法典と判例集 琉球科律・新集科律・糺明法条・平等所記録』本邦書籍、1986 所収。）
- ・「琉球国旧記 天」1734、沖繩県立図書館東恩納文庫所蔵。
- ・「琉球国由来記」1713 初出（伊波普猷 東恩納寛惇 横山 重編『琉球史料叢書』一、井上書房、1962 所収。）

【書籍】

- ・字誌編纂委員会編『手水の恵み許田字誌』名護市許田区、2007。
- ・阿部吉雄・山本敏夫・市川安司・遠藤哲夫『老子・荘子』上 新釈漢文大系 7、明治書院、1998（1966 年初版）。
- ・池田末利訳注『儀禮 I』東海大学出版会、1973。
- ・池宮正治『琉球文学論』沖繩タイムス社、1976。
- ・池宮正治『琉球古語辞典混効験集の研究』第一書房、1995。
- ・板谷 徹『近世琉球の王府芸能と唐・大和』岩田書院、2015。
- ・稲村賢敷『宮古島旧記並史歌集解』至言社、1977。
- ・伊波普猷『校註琉球戯曲集』春陽堂、1929。

- ・犬飼公之『琉球組踊玉城朝薫の世界』瑞木書房、2004。
- ・今井卯三郎 堀池信夫 間嶋潤一著『易経』下、新釈漢文大系 63、明治書院、2008。
- ・上江洲均「《史料紹介》上江洲家蔵『元祖以来善行記』」久米島自然文化センター編『久米島自然文化センター紀要』創刊号、久米島自然文化センター、2001.3。
- ・大宜味村史編集委員会編『大宜味村史』資料編、大宜味村、1978。
- ・大城 學『沖縄芸能史概論』砂子屋書房、2000。
- ・小尾郊一 岡村貞雄訳注『古楽府』東海大学出版会、1980。
- ・沖縄県教育庁文化課編『四本堂家礼』下沖縄県教育委員会、1982。
- ・沖縄県教育庁文化課編『沖縄の組踊（Ⅰ）—無形民俗文化財記録作成—』沖縄県文化財調査報告書第 72 号、沖縄県教育委員会、1986。
- ・沖縄県教育庁文化課編『沖縄の組踊（Ⅱ）—無形民俗文化財記録作成—』沖縄県文化財調査報告書第 82 号、沖縄県教育委員会、1987。
- ・嘉手納宗徳編訳『球陽外巻 遺老説傳』角川書店、1978。
- ・加藤常賢著『書経』上、新釈漢文大系第 25 卷、明治書院、1983。
- ・鎌田正『春秋左氏伝 三』新釈漢文大系 32、明治書院、1977。
- ・宜野座村教育委員会編『宜野座ヌ古島遺跡—一般国道 329 号線宜野座改良（1 工区）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』宜野座村教育委員会、2010。
- ・宜野座村誌編集委員会編『宜野座村誌』第三巻資料編Ⅲ 民俗・自然・考古、宜野座村役場、1989。
- ・宜野座村教育委員会編『宜野座村の民話』下巻（伝説編）、宜野座村教育委員会、1987。
- ・金武区誌編集委員会編『金武区誌』戦前編上、金武区事務所、1994。
- ・具志川市史編さん委員会編『具志川市史』第三巻民話編上、具志川市教育委員会、1997。
- ・具志川市誌編纂委員会編『具志川市誌』具志川市役所、1970。
- ・窪 徳忠『中国文化と南島』第一書房、1995（1981 初版）。
- ・國民文庫刊行會編『桃花扇』國釋漢文大成第十一卷、國民文庫刊行會、1924。
- ・国立劇場おきなわ調査養成課編『国立劇場おきなわ上演資料集〈四〉 手水の縁』財団法人国立劇場おきなわ運営財団、2004。
- ・国立劇場おきなわ調査養成課編『国立劇場おきなわ上演資料集〈五〉 自主公演（会場一周年記念）雪払い』財団法人国立劇場おきなわ運営財団、2005。
- ・国立劇場おきなわ調査養成課編『国立劇場おきなわ上演資料集〈九〉 女物狂』財団法人 国立劇場おきなわ運営財団、2006。
- ・国立劇場おきなわ調査養成課編『国立劇場おきなわ上演資料集〈十〉 花売の縁』国立劇場おきなわ調査養成課、2006.10。
- ・国立劇場おきなわ調査養成課編『国立劇場おきなわ上演資料集〈十一〉 孝行の巻』財団法人国立劇場おきなわ運営財団、2007。
- ・国立劇場おきなわ調査養成課編『国立劇場おきなわ上演資料集〈十五〉 自主公演 大

- 城崩』財団法人国立劇場おきなわ運営財団、2007。
- ・国立劇場おきなわ調査養成課編『国立劇場おきなわ上演資料集〈十八〉銘苺子』財団法人国立劇場おきなわ運営財団、2007。
 - ・国立劇場おきなわ調査養成課編『国立劇場おきなわ上演資料集〈二十〉大川敵討』国立劇場おきなわ、2009。
 - ・国立劇場おきなわ調査養成課編『国立劇場おきなわ上演資料集〈二十一〉伏山敵討』財団法人国立劇場おきなわ運営財団、2010。
 - ・国立劇場おきなわ調査養成課編『国立劇場おきなわ上演資料集〈二十三〉二童敵討』財団法人国立劇場おきなわ運営財団、2011。
 - ・国立劇場おきなわ調査養成課編『国立劇場おきなわ上演資料集〈三十二〉女物狂』国立劇場おきなわ、2014。
 - ・国立劇場おきなわ調査養成課編『国立劇場おきなわ上演資料集〈四十一〉仲村渠真嘉戸』国立劇場おきなわ、2016。
 - ・国立中央図書館編「古楽府」『四庫全書 珍本』12集200、台湾商務印書館、1982。
 - ・(財)海洋博覧会記念公園管理財団編『首里城普及書「御冠船踊—組踊と舞踊—」』(財)海洋博覧会記念公園管理財団、2000。
 - ・島袋全發『那覇変遷記』沖縄書籍、1930。
 - ・浙江文芸出版社編『山海経叢書3 西施的故事』浙江文芸出版社、1983。
 - ・仙石知子『明清小説における女性像の研究』汲古書院、2011。
 - ・臧晋叔編『元曲選』二 文学古籍刊行社、1955。
 - ・高橋俊三『琉球王国時代の初等教育—八重山における漢籍の琉球語資料』榕樹書林、2011。
 - ・田里友哲『論集沖縄の集落研究』離宇宙社、1983。
 - ・高良倉吉『琉球の時代 大いなる歴史像をもとめて』ちくま学芸文庫、2012。
 - ・田島利三郎『琉球文学研究』第一書房、(1924初版)1988。
 - ・玉栄清良『組踊手水の縁の研究』国際大学出版会、1967
 - ・多良間村史編集委員会編『多良間村史 第五巻資料編4(芸能)』、多良間村、1989。
 - ・多良間村史編集委員会編『多良間村史』第四巻資料編3(民俗)、多良間村、1993。
 - ・知名定寛『沖縄宗教史の研究』榕樹社、1994。
 - ・北谷町史編集委員会編『北谷町史』第三巻資料編2 民俗上、北谷町役場、1992。
 - ・張競『恋の中国文明史』筑摩書房、1997。
 - ・趙爾巽撰『清史稿』巻45 中華書局、1986。
 - ・當間一郎『組踊の世界』前里宗幹、1972。
 - ・當間一郎『組踊研究』第一書房、1993。
 - ・當間一郎『組踊写本の研究』第一書房、1999。
 - ・独立行政法人日本芸術文化振興会 公益財団法人国立劇場おきなわ運営財団編『国立

- 劇場おきなわ 10 年誌』、公益財団法人国立劇場おきなわ運営財団、2014。
- ・豊見城村教育委員会村史編纂室編『豊見城村史』第九卷文献資料編、豊見城村役所、1998。
 - ・仲原善忠 外間守善編『校本 おもろさうし』角川書店、1965。
 - ・今帰仁村歴史文化センター編『山原の津（港）と山原船』沖縄県今帰仁村教育委員会、2005。
 - ・名護市史編さん室編『名護市史叢書 7 名護の民話』名護市教育委員会、1989。
 - ・那覇市歴史博物館編『国宝「琉球国王尚家関係資料」のすべて 尚家資料／目録・解説』沖縄タイムス社、2006。
 - ・西里喜行 赤嶺守 豊見山和行主編『国立臺灣大學圖書館典藏 琉球關係史料集成』第四卷、国立臺灣大學圖書館、2017。
 - ・西原町史編纂委員会編『西原町史』第四卷資料編三西原の民俗、西原町役場、1989。
 - ・畠中敏郎『組踊と大和芸能』ひるぎ社、1993。
 - ・平川 彰『インド 中国 日本 仏教通史』春秋社、2004（1977 初版）。
 - ・房喬等選『百衲本二十四史 晋書』上、台湾商務印書館、1937。
 - ・外間守善 比嘉実 仲程昌徳編『南島歌謡大成 沖縄篇』下、角川書店、1980。
 - ・外間守善校注『おもろさうし』下、岩波書店、2015。
 - ・真境名由康生誕一〇〇年記念事業会編『真境名由康 人と作品』下・作品編、真境名由康生誕一〇〇年記念事業会、1990。
 - ・松原 朗 佐藤浩一 児島弘一郎著『教養のための中国古典文学史』研文出版、2010。
 - ・道端良秀『中國佛教史 改訂新版』法蔵館、1972。
 - ・昔話研究懇話会編『南島の昔話〈昔話—研究と資料—〉第七号』三弥井書店、1979。
 - ・森山豊明『不義密通と近世の性民俗』同成社、2012。
 - ・柳田國男『海南小記』大岡山書店、1952。
 - ・矢野輝雄『組踊への招待』琉球新報社、2001。
 - ・矢野輝雄『組踊を聴く』瑞木書房、2003。
 - ・矢野美沙子『古琉球期首里王府の研究』校倉書房、2014。
 - ・屋良誌編集委員会編『嘉手納町屋良誌』字屋良共栄会、1992。
 - ・吉田賢抗著『論語』新釈漢文大系第 1 卷、明治書院、（1960 年初版）1998。
 - ・吉田伸之『近世都市社会の身分構造』東京大学出版会、1998。
 - ・立命館大学説話文学研究会 佐敷町教育委員会編『沖縄・佐敷町の昔話』立命館大学説話文学研究会 佐敷町教育委員会、1989。
 - ・劉向著 中島みどり訳注『列女伝』2、平凡社、2001。
 - ・劉富琳『琉球組舞与中国戯曲』海峡文芸出版社、2001。

【論文】

- ・麻生伸一「近世琉球における災害・災禍と祭祀に関する一考察」研究代表 山田浩世『沖縄・奄美島嶼社会における災害・防災の歴史的変遷に関する包括的研究』山田浩世、2013.3。
- ・荒川さち子「能と組踊の比較研究」（1978年初出）（国立劇場おきなわ調査養成課編『国立劇場おきなわ上演資料集〈三十二〉女物狂』国立劇場おきなわ、2014所収。）
- ・池宮正治「組踊の論理—朝薫の〈五組〉を中心に—」（1970年初出）（池宮正治『琉球文学論』沖縄タイムス社、1976所収。）
- ・池宮正治「田里朝直と組踊—家譜発見の意義—」（1983初出）（池宮正治著 島村幸一編『琉球芸能総論』池宮正治著作選集2、笠間書院、2015所収。）
- ・池宮正治「組踊〈銘苺子〉研究の基礎」法政大学沖縄文化研究所編『沖縄文化研究』第13号、法政大学沖縄文化研究所、1987.2。
- ・池宮正治「冠船芸能の準備—踊奉行の任命と故事集—」『沖縄開発振興推進調査報告書』文化庁文化財保護部伝統文化課、1993。
- ・池宮正治「組踊の作者は正しく伝えられたか」琉球大学法文学部編『日本東洋文化論集』第2号、琉球大学法文学部、1996.3。
- ・池宮正治「多良間の組踊台本に関する若干のコメント」高良倉吉研究代表『沖縄県多良間島における伝統的社会システムの実態と変容に関する総合的研究』平成9・10・11年度科研報告書、2000.3。
- ・池宮正治「首里城の舞台に供された組踊と知られざる組踊」琉球大学法文学部編『日本東洋文化論集』第7号、2001.3。
- ・池宮正治「祭祀（神歌・儀礼・のろ制度）と文学のなかの女性」豊見山和行編『琉球・沖縄史の世界』吉川弘文館、2003。
- ・池宮正治「能楽と組踊」（2004年初出）（池宮正治著 島村幸一編『琉球芸能総論』池宮正治著作選集2、笠間書院、2015所収。）
- ・石田晶子「沖縄におけるミルク信仰の現状」琉球アジア社会文化研究会編『琉球アジア社会文化研究』第16号、琉球アジア社会文化研究会、2013.11。
- ・板谷徹「御冠船踊りを観る冊封使」沖縄県立芸術大学編『沖縄県立芸術大学音楽学研究誌 ムーサ』第13号、沖縄県立芸術大学、2012.3。
- ・板谷徹「女踊り〈諸屯〉の成立—琉歌の視点から—」沖縄県立芸術大学編『沖縄県立芸術大学紀要』第20号、2012.3。
- ・板谷徹「故事としての御冠船踊り—尚敬冊封の画期—」沖縄県立芸術大学編『ムーサ 沖縄県立芸術大学音楽学研究誌』第14号、沖縄県立芸術大学、2013.3。
- ・板谷徹「尚家文書解題抄—冠船関係資料」沖縄県立芸術大学編『沖縄県立芸術大学紀要』第21号、沖縄県立芸術大学、2013.3。
- ・糸数兼治「復讐の倫理と論理—組踊〈護佐丸敵討〉を中心とした考察—」沖縄県立図

- 書館史料編集室編『史料編集室紀要』第15号、沖縄県立図書館史料編集室、1990.3。
- ・伊波普猷「阿麻和利考」1905.6 初出（伊波普猷『古琉球』青磁社、1942 所収。）
 - ・伊波普猷「琉球作戯の鼻祖玉城朝薫年譜—組踊の発生」伊波普猷『校註琉球戯曲集』春陽堂、1929。
 - ・伊波普猷「「大川敵討」の間の者の独語 底本の記載方の誤に就て」（1934 年初出）（伊波普猷『伊波普猷全集』第九卷、平凡社、1975 所収。）
 - ・伊波普猷「中世に於ける沖縄と道之島との交渉—「阿摩和利考」の展開—」1937.5 初出（伊波普猷『伊波普猷全集』第六卷、平凡社、1985 所収。）
 - ・上田 望「【研究ノート】〈蝴蝶夢〉再読」金沢大学編『金沢大学中国語学中国文学教室紀要』第5輯、金沢大学、2001.3。
 - ・大城 學「調査ノート 組踊〈義臣物語〉上演台本」（1983 年初出）（国立劇場おきなわ調査養成課編『国立劇場おきなわ上演資料集〈十三〉義臣物語』国立劇場おきなわ運営財団、2007.9 所収。）
 - ・大城 學 宜保榮治郎 瀬底正憲「組踊〈女物狂〉」文化庁文化財保護部伝統文化課編『組踊等沖縄伝統演劇の台本等に関する調査』平成5年度沖縄振興開発計画推進調査報告書、文化庁文化財保護部伝統文化課、1994.3。
 - ・大城 學 宜保榮次郎 瀬底正憲 宮城信治「組踊〈孝行の巻〉」文化庁文化財保護部伝統文化課編『平成5年度 沖縄振興開発計画推進調査報告書 組踊等沖縄伝統演劇の台本等に関する調査』文化庁文化財保護部伝統文化課、1994.3。
 - ・大城 學 宜保榮次郎 瀬底正憲 宮城信治「組踊 二童敵討」文化庁文化財保護部伝統文化課編『平成5年度沖縄振興開発計画推進調査報告書 組踊等沖縄伝統演劇の台本等に関する調査』、文化庁文化財保護部伝統文化課、1994.3。
 - ・大城 學 宜保榮治郎 瀬底正憲 宮城信治「組踊〈銘苺子〉」文化庁文化財保護部伝統文化課編『平成5年度沖縄振興開発計画推進調査報告書 組踊等沖縄伝統演劇の台本等に関する調査』文化庁文化財保護部伝統文化課、1994.3。
 - ・大城學 宜保榮治郎 瀬底正憲 宮城信治「組踊〈大川敵討〉伝承資料」文化庁文化財保護部伝統文化課編『平成6年度沖縄振興開発計画推進調査報告書 組踊、狂言等沖縄伝統演劇の伝承演目の状況及び内容等に関する調査』文化庁文化財保護部伝統文化課、1995.3。
 - ・大城學「組踊台本は如何にして筆写されてきたのか」琉球大学法文学部編『日本東洋文化論集』第19号、2013.3。
 - ・大城 學「組踊〈花売の縁〉の台本の考察」沖縄文化協会編『沖縄文化』第114号、沖縄文化協会、2013.9。
 - ・大城 學「組踊〈二童敵討〉の演出論」琉球大学法文学部編『琉球アジア文化論集』第三号、琉球大学法文学部、2017.3。
 - ・岡倉由三郎「琉球に傳はれる羽衣傳説」帝國文學會編『帝國文學』第6卷第7号、大

- 日本圖書、1900.7。
- ・織田紘二「近世大道芸人資料（十三）—猿まわしの系譜（三）」藝能学会編『藝能』第九卷第九号、舞踏藝術社、1993.11。
 - ・川平朝申「組踊〈忠孝婦人〉—作者は、久手堅親雲上」中今 信編『組踊研究』第 2号、真境名組踊会、1969.2。
 - ・我部大和「尚家文書〈兄弟報仇忠孝並全〉（演戯故事）について —組踊台本・冊封使録との比較を中心に—」.琉球アジア社会文化研究会編『琉球アジア社会文化研究』第 14号、2011.10。
 - ・我部大和「演戯故事から見る近世琉球の組踊りの世界」琉球中国関係国際學術會議編『琉球大学法文学部・台湾大学文学院国際學術會議シンポジウム論文集 トランスナショナルな文化伝播—東アジア文化交流の学際的研究』琉球中国関係国際學術會議、2015.3。
 - ・我部大和「冊封使に供された組踊〈雪払い〉の一考察—演戯故事・組踊台本の内容比較を中心に—」琉球大学国際沖繩研究所編『越境する東アジア世界 第 15 回琉中関係国際學術研討会論文集』琉球大学国際沖繩研究所、2016.2。
 - ・我部大和「冊封使に供された組踊〈孝行の巻〉に関する一考察」琉球大学国際沖繩研究所編『国際琉球沖繩論集』第 6号、琉球大学国際沖繩研究所、2017.3。
 - ・我部大和「〈演戯故事〉に記された組踊〈大城崩〉に関する一考察—組踊台本・冊封使録との内容比較を中心に—」沖繩文化協会編『沖繩文化』第 121号、沖繩文化協会、2017.8。
 - ・亀井明德「南西諸島における貿易陶磁器の流通経路」上智大学アジア文化研究所編『上智アジア学』第 11号、上智大学アジア文化研究所、1993.12。
 - ・蒲生美津子「作品研究〈女物狂〉」（1991年初出）（国立劇場おきなわ調査養成課編『国立劇場おきなわ上演資料集〈三十二〉女物狂』国立劇場おきなわ、2014所収。）
 - ・小林愛雄「バナナの蔭」『太陽』1911.12 初出（仲程、前掲「明治期における沖繩文学研究の動向」、1987.3所収。）
 - ・崎原綾乃「琉球王府時代の冠船芸能の研究—冠船七宴と遊覧—」2009年度琉球大学大学院人文社会科学研究科比較地域文化専攻博士論文。
 - ・史静「明・清時代北京における娯楽について」兵庫教育大学東洋史研究会編『東洋史訪』第 13号、兵庫教育大学東洋史研究会、2007.3。
 - ・島袋源七「琉球に於ける猪の話」岡村千秋編『民族』第 3 卷第 1 号、民族發行所、1927。
 - ・笑受子訳「琉球演劇手水の縁」『早稲田文学』第 63号、1894 初出（仲程昌徳「明治期における沖繩文学研究の動向」琉球大学法文学部編『琉球大学法文学部紀要 国文学論集』第 31号、1987.3所収）
 - ・末吉安恭「組躍小言」伊波普猷『校註琉球戯曲集』春陽堂、1928。

- ・鈴木耕太「組踊 敵討物の歌謡」琉球アジア社会文化研究会編『琉球アジア社会文化研究』第9号、琉球アジア社会文化研究会、2006.11。
- ・鈴木耕太、「冊封の舞台に供された組踊」沖縄文化協会編『沖縄文化』106号、沖縄文化協会、2009.12。
- ・鈴木耕太「尚家旧蔵〈組踊集〉—翻訳と注釈—（上）」沖縄県立芸術大学編『沖縄芸術の科学 沖縄県立芸術大学附属研究所紀要』第22号、沖縄県立芸術大学、2010.3。
- ・鈴木耕太「尚家旧蔵〈組踊集〉—翻訳と注釈—（下）」沖縄県立芸術大学編『沖縄芸術の科学 沖縄県立芸術大学附属研究所紀要』第23号、沖縄県立芸術大学、2011.3。
- ・鈴木耕太「組踊台本の基礎的研究」平成26年度沖縄県立芸術大学大学院博士学位論文、2015.3。
- ・鈴木耕太「〈拝留めやへて〉 試論—朝薫五番を中心に—」沖縄県立芸術大学編『沖縄県立芸術大学』第25号、沖縄県立芸術大学、2017.3。
- ・鈴木耕太「組踊の〈悪役〉をめぐって—古典組踊の役名の概念～主たる悪役の名前を中心に—」沖縄県立芸術大学附属研究所編『沖縄芸術の科学』第29号、沖縄県立芸術大学附属研究所、2017.3。
- ・高木敏雄「羽衣傳説の研究」帝國文學會編『帝國文學』第6巻第3号、大日本圖書、1900.3。
- ・高津 孝「組踊と演戯故事」『第2回琉球漢詩文研究会』2015.3.14 報告資料（平成26—28年度科学研究費補助金基盤研究（B）高津 孝編『新出資料による琉球処分期琉球知識人の総合的研究—そのアイデンティティに着目して—報告書』、鹿児島大学、2017.7。）
- ・高橋俊三「竹原家文書〈二十四孝〉の翻字および訳注」沖縄国際大学日本語日本文学会編『沖縄国際大学日本語日本文学研究』8巻2号、沖縄国際大学文学部、2004.3。
- ・田名真之「自立への模索」豊見山和行編『琉球・沖縄史の世界』吉川弘文館、2003。
- ・高良倉吉「首里王府とトキ・ユタ禁圧—近世琉球におけるユタ問題の構造—」沖縄県沖縄史料編集所編『沖縄史料編集所紀要』第10号、1985.3。
- ・田島利三郎「阿摩和利加那といへる名義」1898.5 初出（田島利三郎『琉球文学研究』第一書房、1988 所収。）
- ・田畑博子「能と組踊の間—〈羽衣〉と〈銘苺子〉」沖縄文化協会編『沖縄文化』第47号、沖縄文化協会、1977.3。
- ・玉栄清良「組踊と沖縄文学」岩波書店編『文学』第36巻第1号、岩波書店、1968.1。
- ・陳継東「仏教民間信仰の諸相」沖本克己編『中国文化としての仏教』校正出版社、2010。
- ・陳青鳳「清朝の婦女旌表制度について—節婦・烈女を中心に—」九州大学文学部編『九州大学東洋史論集』第16号、東洋史研究会、1988.1。
- ・陳 碩炫「清代琉球進貢使節派遣日程について」赤嶺 守 朱 徳蘭 謝 必震編『中国と琉球 人の移動を探る—明清時代を中心としたデータの構築と研究』彩流社、2013、

- ・ 當間一郎「組踊〈手水の縁〉の民俗学的研究(1)」宮良當壯編『月刊琉球文学』創刊号、武蔵野女子学院短期大学琉球文学講座、1960.1。
- ・ 當間一郎「組踊〈手水の縁〉の民俗学的研究(2)」宮良當壯編『月刊 琉球文学』第2号、武蔵野女子学院短期大学琉球文学講座、1960.2。
- ・ 當間一郎「組踊〈銘苺子〉の世界」国学院大学編『国学院雑誌』84巻5号、国学院大学出版部、1983。
- ・ 當間一郎「組踊〈手水の縁〉の現存写本の考察—特に使用音楽を中心に—」沖縄県立図書館史料編集室編『史料編集室紀要』第15号、沖縄県立図書館史料編集室、1990.3。
- ・ 得能壽美「琉球・八重山における猪対策—近世における文書の公的世界と絵画の詩的世界—」神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター編『年報 非文字資料研究』第10号、2014.3。
- ・ 豊見山和行「近世琉球史料〈諸役増減〉について」琉球大学教育学部編『琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部』第48号、琉球大学教育学部、1996.3。
- ・ 豊見山和行「冠船貿易からみた琉球王国末期の対清外交」琉球大学法文学部編『日本東洋文化論集』第6号、琉球大学法文学部、2000.3。
- ・ 豊見山和行「前近代琉球の家族・夫婦・親子をめぐる権力関係」喜納育江編『沖縄ジェンダー学1「伝統」へのアプローチ』大月書店、2014。
- ・ 仲宗根幸男「久手堅親雲上と組踊〈大川敵討〉考—家譜探索の意義—」知念村文化協会編『齋場の杜』第6号、知念村文化協会、1997.6。
- ・ 仲地哲夫「近世における琉球・薩摩間の商品流通」九州大学文学部九州文化史研究施設編『九州文化史研究所紀要』第三十六号、九州大学文学部九州文化史研究施設、1991.3。
- ・ 長友 武「組踊〈女物狂〉の系譜」琉球大学教育学部図書紀要委員会編『琉球大学教育学部紀要』第25集第一部、琉球大学教育学部、1981.12。
- ・ 長浜真勇「歌劇〈手水の縁〉について—読谷村字長浜の事例—」沖縄藝能史研究会編『沖縄藝能史研究』第8号、1993.7。
- ・ 仲間勇栄「〈林政八書〉中の〈山奉行所公事帳〉：その和訳と内容分析」琉球大学農学部編『琉球大学農学部学術報告』第62号、琉球大学農学部、2015.12。
- ・ 中村 史「継子の雪払い」(小樽商科大学編『小樽商科大学人文研究』第109号、小樽商科大学、2005.3。
- ・ 仲吉良光「老人閑話 組踊“花賣の縁”と謡曲“蘆刈”」琉球組踊保存会編『組踊研究』第5号、琉球組踊保存会、1972.4。
- ・ 西銘郁和「〈手水の縁〉と〈花売の縁〉のえにし迄」脈発行所編『脈』第28号、1986.11。
- ・ 野口善敬「元・明の仏教」沖本克己編『中国文化としての仏教』校正出版社、2010。
- ・ 東恩納寛淳「二童敵討阿摩和利の服装について」琉球新報、1955.11.14(琉球新報社編『東恩納寛淳全集』第8巻、第一書房、1980所収。)

- ・比嘉美代子「〈泊阿嘉〉の〈つらね〉と乳母（アンマー）についての一考察」沖縄文化協会編『沖縄文化』第75号、沖縄文化協会、1991.11。
- ・平敷令治「山原の猪垣・猪狩・猪狩儀礼」仲松弥秀先生傘寿記念論文集刊行委員会編『神・村・人—琉球弧論叢—』第一書房、1991。
- ・外間政明「尚家継承古文書の既存目録と評定所文書」那覇市市民文化部歴史資料室編『尚家関係資料総合調査報告書Ⅰ 古文書編』、那覇市、2003.3。
- ・堀口修「尚侯爵家東京邸所蔵史（資）料に関する基礎的研究—諸所蔵目録との比較検討を通して—」日本古文書学会編『古文書研究』第56号、吉川弘文館、2002.1。
- ・真境名安興「組踊〈忠孝婦人〉について」（1925年初出）（真境名安興『真境名安興全集』第四巻、琉球新報社、1993所収。）
- ・真境名安興「組躍と能楽との考察」伊波普猷『校註琉球戯曲集』春陽堂、1929。
- ・又吉康和「花賣之縁」又吉康和編『南鵬』第2巻第1号、沖縄縣海外協會、1926.12。
- ・松村潤「清朝開国説話再考」二松学舎大学編『二松学舎大学人文論叢』第61号、二松学舎大学、1998.10。
- ・三浦國雄「琉球における〈朱子家礼〉の受容と普及過程—〈四本堂家礼の性格〉」（吾妻重二 朴元在編『朱子家礼と東アジアの文化交渉』汲古書院、2012。）
- ・水越知「中国近世における親子間訴訟」夫馬進編『中国訴訟社会史の研究』京都大学学術出版会、2011。
- ・宮城能鳳・瀬底正憲・大城學「上演資料〈大城崩〉」文化庁文化財保護部伝統文化課編『組踊等伝統芸能の音曲・衣裳の調査研究』1995.3 初出（国立劇場おきなわ調査養成課編『国立劇場おきなわ上演資料集〈十五〉自主公演 大城崩』2008所収。）
- ・宮良當壯「組踊雪はらい（1）」（宮良當壯編『月刊 琉球文学』第7号、武蔵野女子短期大学、1960.7。）
- ・宮良當壯「組踊雪はらい（2）」（宮良當壯編『月刊 琉球文学』第7号、武蔵野女子短期大学、1960.7。）
- ・宮良當壯「組踊雪はらいの典拠に関する研究」（『月刊 琉球文学』第7号、1960.7初出）、（宮良當壯編『宮良當壯全集』第12巻、第一書房、1970所収。）
- ・宮良當壯「組踊雪はらいの典拠に関する研究」（『月刊 琉球文学』第7号、1960.7初出）、（宮良當壯編『宮良當壯全集』第12巻、第一書房、1970所収。）
- ・屋宜盛峰「A TALE OF THE TRUE LIEGE;OR,KUNISHI ; NU-HYA by chouchoku Tasato ; 〈義臣物語、一名、国吉の比屋〉」琉球大学教養部言語文化研究会編『言語文化研究紀要』第5号、琉球大学教養部言語文化研究会、1996.8。
- ・矢野輝雄「沖縄の狂言—沖縄芸能における狂言の影響を中心に—」法政大学沖縄文化研究所編『沖縄文化研究』第8号、法政大学沖縄文化研究所、1981.3。
- ・矢野輝雄「〈隅田川〉と〈女物狂〉を結ぶもの」（1987年初出）（国立劇場おきなわ調査養成課編『国立劇場おきなわ上演資料集〈九〉女物狂』財団法人 国立劇場おきな

- わ運営財団、2006 所収。)
- ・矢野輝雄「隅田川物の展開—隅田川のトポス—」(1991 年初出) (国立劇場おきなわ調査養成課編『国立劇場おきなわ上演資料集〈三十二〉女物狂』国立劇場おきなわ、2014 所収。)
 - ・矢野輝雄「組踊〈手水の縁〉の作者について—池宮正治氏の所説にふれて—」矢野輝雄『組踊を聴く』瑞木書房、2004。
 - ・山里純一「〈四本堂家礼〉に関する基本的考察」(琉球大学法文学部編『日本東洋文化論集』第 16 号、2010.3。)
 - ・山田浩世「〈尚家文書〉所収冠船関係資料の総体的位置付け—〈冠船方諸帳〉を手がかりとして—」琉球アジア社会文化研究会編『琉球アジア社会文化研究』第 14 号、琉球アジア社会文化研究会、2011.10。
 - ・山田有幹「阿麻和利と人盗人」『月刊 沖縄文化』第二卷第三号、月刊沖縄文化社、1941 初出 (国立劇場おきなわ調査養成課編『国立劇場おきなわ上演資料集〈二十三〉自主公演 二童敵討』、国立劇場おきなわ、2011 所収)
 - ・劉守華「閩台蛇郎故事的民俗文化根基」中国民間文芸家協会編『民間文化論壇』中国民間文芸家協会、1995。
 - ・劉富琳「研究ノート 琉球における中国戯曲の受容」東洋音楽学会編『東洋音楽研究』第 72 号、第一書房、2007。
 - ・劉富琳「中国戯曲対琉球戯曲形成的影響」西安音楽学院編『西安音楽学院学報 交響』西安音楽学院『交響』編集部、2011。

【資料】

- ・阿波根朝松「真境名本〈雪払い〉上演に寄せて」(真境名由康組踊会編『組踊鑑賞会』公演パンフレット、真境名由康組踊会発行、1976.5.27。)
- ・池宮正治「演目解説 女物狂」(財)海洋博覧会記念公園管理財団編『首里城普及書御冠船踊—組踊と舞踊—』(財)海洋博覧会記念公園管理財団、2000。
- ・池宮正治「組踊とは」(財)海洋博覧会記念公園管理財団編『首里城普及書御冠船踊—組踊と舞踊—』(財)海洋博覧会記念公園管理財団、2000。
- ・大城 學「調査ノート 組踊〈義臣物語〉上演台本」(1983 年初出) (国立劇場おきなわ調査養成課編『国立劇場おきなわ上演資料集〈十三〉義臣物語』国立劇場おきなわ運営財団、2007.9 所収。)
- ・大城 學「〈伏山敵討〉分布一覧と分布地図」(沖縄県教育文化課編『沖縄の組踊 (I) —無形民俗文化財記録作成—』沖縄県教育委員会、1987 初出) (国立劇場おきなわ調査養成課編前掲『国立劇場おきなわ上演資料集〈二十一〉伏山敵討』財団法人国立劇場おきなわ運営財団、2010 所収。)
- ・大城 學「組踊〈伏山敵討〉と〈忠孝敵討〉」国立劇場おきなわ調査養成課編前掲『国

立劇場おきなわ上演資料集<二十一> 伏山敵討』財団法人国立劇場おきなわ運営財団、2010。

- ・大城 學「組踊〈義臣物語〉」（国立劇場おきなわ調査養成課編『国立劇場おきなわ上演資料集〈十三〉義臣物語』国立劇場おきなわ運営財団、2007.9 所収。）
- ・「沖映演劇〈孝子と王道〉」（1970.12 初出）（国立劇場おきなわ調査養成課編『国立劇場おきなわ上演資料集〈十一〉孝行の巻』財団法人国立劇場おきなわ運営財団、2007 所収。）
- ・片山春帆「昭和十一年〈琉球古典芸能大会〉スケッチ」（国立劇場おきなわ調査養成課編『国立劇場おきなわ上演資料集〈二十三〉二童敵討』財団法人国立劇場おきなわ運営財団、2011 所収。）
- ・「〈義臣物語〉台本目録」（1987 初出）（国立劇場おきなわ調査養成課編『国立劇場おきなわ上演資料集〈十三〉義臣物語』国立劇場おきなわ運営財団、2007.9 所収。）
- ・「許田の美娘」字誌編纂委員会編『手水の恵み許田字誌』名護市許田区、2007。
- ・「許田の手水と美女」名護市史編さん室編『名護市史叢書 7 名護の民話』名護市教育委員会、1989。
- ・「宜野座部落の始まり」遠藤庄司監修 宜野座村教育委員会編『宜野座村の民話』下巻（伝説編）、宜野座村教育委員会、1987。
- ・古波蔵保好「組踊に現れた国頭言葉」金武良章琉球芸能研究所編『組踊の夕 第 10 回』公演パンフレット、金武良章琉球芸能研究所、1982.1.17。
- ・崎間麗進「組踊〈孝行の巻〉を考える」（1980.3 初出）（當間一郎編集責任『沖縄藝能史研究会会報』（第 1 号～80 号）沖縄藝能史研究会、1989 所収。）
- ・「上演年表」国立劇場おきなわ調査養成課編『国立劇場おきなわ上演資料集<四> 手水の縁』財団法人国立劇場おきなわ運営財団、2004。
- ・「上演年表」国立劇場おきなわ調査養成課編『国立劇場おきなわ上演資料集〈十一〉孝行の巻』財団法人国立劇場おきなわ運営財団、2007。
- ・「上演年表（抄）」国立劇場おきなわ調査養成課編『国立劇場おきなわ上演資料集〈十八〉銘苺子』財団法人国立劇場おきなわ運営財団、2007。
- ・當間一郎「組踊〈雪払い〉について—真境名由康組踊会の上演に当たって—」（真境名由康組踊会編『組踊鑑賞会』公演パンフレット、真境名由康組踊会発行、1976.5.27。）
- ・渡口政興「組踊 護佐丸敵討の型 一名、二童敵討」伊波普猷先生記念論文集編纂委員編『南島論叢』1937。
- ・「〈仲村渠真嘉戸〉について」国立劇場おきなわ調査養成課編『国立劇場おきなわ上演資料集〈四十一〉仲村渠真嘉戸』国立劇場おきなわ、2016.12。
- ・西銘郁和「組踊〈花売の縁〉と〈身貧男去妻成撰津守妻語〉（今昔物語）を比照しながら」（1990.3 初出）（當間一郎編『沖縄藝能史研究会会報綴』沖縄藝能史研究会、2015.12 所収。）

- ・ 畠中敏郎「〈雪払い〉と〈竹雪〉」（真境名由康組踊会編『組踊鑑賞会』公演パンフレット、真境名由康組踊会発行、1976.5.27。）
- ・ 「〈花売の縁〉台本目録」国立劇場おきなわ調査養成課編『国立劇場おきなわ上演資料集〈十〉花売の縁』国立劇場おきなわ調査養成課、2006.10。
- ・ 玻名城泰雄 内原節子「伊祖の子組（用方本）」沖縄県教育文化課編『沖縄の組踊（Ⅱ）—無形民俗文化財記録作成』沖縄県教育委員会、1987.3。
- ・ 矢野輝雄「南島の雪月花」（真境名由康組踊会編『組踊鑑賞会』公演パンフレット、真境名由康組踊会発行、1976.5.27。）
- ・ 「屋良漏池の説話について」国立劇場おきなわ調査養成課編『国立劇場おきなわ上演資料集〈十一〉孝行の巻』財団法人国立劇場おきなわ運営財団、2007 所収。

【新聞資料】

- ・ 「圧巻! 組踊「伊祖の子」116年ぶり復活」八重山毎日新聞、2011.7.18。
- ・ 池宮喜輝「琉球芸能三つの考察 組踊「大川敵討」上演について」（上）、琉球新報、1966.7.4、琉球新報、朝刊 8 面。
- ・ 池宮正治「〈手水の縁〉の問題」下、1984.6.15、沖縄タイムス、朝刊 9 面。
- ・ 池宮正治「〈手水の縁〉研究のすすめ—西銘氏「再批判」の虚論を撃つ—〈1〉」1984.10.24、琉球新報、朝刊 4 面。
- ・ 茨木憲「国立劇場〈大川敵討〉をみて」1974.2.6、琉球新報、朝刊 4 面。
- ・ 上間朝久「大川敵討を見る」1966.2.17、琉球新報、朝刊 8 面。
- ・ 「組踊保存会あすから〈大川敵討〉公演」1966.2.8、琉球新報、朝刊 5 面。
- ・ 「組踊〈雪払〉85年ぶり上演 切なさ、悲しみ表現」2015年2月20日、琉球新報、30 面。
- ・ 佐久本政喜「〈大川敵討〉を見て しろうとの目に写った組踊（上）」1966.3.7、琉球新報、朝刊 8 面。
- ・ 尚秀「組踊を観て（一）—〈手水の縁〉〈花売の縁〉—」1912.8.29、沖縄毎日新聞、2 面。
- ・ 城間文徳「“大川敵討”雑感寸評」1966.2.15、沖縄タイムス、朝刊 8 面。
- ・ 當間一郎「〈大川敵討〉の文学性 組踊保存会の上演に寄せて」1966.2.8、琉球新報、朝刊 5 面。
- ・ 當間一郎「組踊・忠孝婦人を見て」（上）（下）1976.1.15～16、琉球新報、朝刊 5 面。
- ・ 畠中敏郎「組踊と大和芸能—孝行之巻を例として」1976.7.22、沖縄タイムス、5 面。
- ・ 畠中敏郎「組踊と冊封使録」1976.10.12、沖縄タイムス。
- ・ 仲井真元楷「大川敵討問答」1966.2.27、琉球新報、朝刊 5 面。
- ・ 仲吉良光「文化財保護に全力を 組踊の伝統を重んぜよ」1972.6.21 沖縄タイムス、5 面。

- ・西銘郁和「〈手水の縁〉は朝敏作ではないのか 池宮正治氏の見解を批判する〈下〉」1984.7.28、琉球新報、朝刊 8 面。
- ・真境名安宜「〈忠孝婦人〉の作者は久手堅親雲上」1934.11.17、琉球新報。
- ・「幻の組踊〈雪払い〉 最古の台本写し見つかる」1978.11.19、沖縄タイムス、朝刊 14 面。
- ・藪の鶯「花売の縁」琉球新報、1910.4.29～5.2。
- ・藪の鶯「二童敵討」1910.5.10・11、琉球新報。
- ・山里永吉「組踊雑感 〈花売の縁〉の作者（上）」1965.11.9、琉球新報、朝刊 8 面。
- ・山里永吉「組踊雑感 〈花売の縁〉の作者（下）」1965.11.10、琉球新報、朝刊 8 面。

【辞典】

- ・伊波普猷「琉球劇」『日本文学大辞典』（1934 初出）（『伊波普猷全集』第十卷平凡社、1976 所収。）
- ・「観音寺」平凡社地方資料センター編『沖縄県の地名』平凡社、2002。
- ・「蛟」『説文解字』卷十三上（臺灣商務印書館編『四部叢刊初編縮本』5 臺灣商務印書館、1967。）
- ・渡口真清「無禄士族」沖縄大百科事典刊行事務局編『沖縄大百科事典』下巻、沖縄タイムス社、1983。
- ・馬紫晨主編『中国豫劇大詞典』中州古籍出版社、1998。
- ・「若狭町」（吉田東伍『大日本地名辞書』続篇 1909 年。）（琉球新報社編『東恩納寛惇全集』第 6 卷、第一書房、1979 所収。）附録